ISSN 0912-3946

京都体育学研究

原著

古市久子：幼児におけるダンス模倣の発達的研究 …… 1
坂なつこ：ノルベルト・エリアスにおけるスポーツ …… 9

資料

岡尾惠市：黎明期における女性陸上競技および女性中長距離・
マラソンに関する略年表 …… 17

京都体育学会

第 14 巻
平成11年2月

「京都体育学研究」編集・投稿規定

昭和60年４月４日制定

1．「京都体育学研究」（英文名 Kyoto Journal of Physical Education,以下本誌）は，京都体育学会の機関誌であり年一回以上発行する。

2．本誌は本学会会員の体育・スポーツに関する論文の発表にあてる。編集委員会が認めた場合には会員以外に寄稿を依頼することもできる。

3．１編の論文の長さは本誌８ページ以内を原則とする。

4．原稿は，所定の執筆要項に準拠して作成し，原著・資料などの別を指定して編集委員長あてに提出する。原文のほかにコピー２部提出する。

5．投稿論文は，学術論文としてふさわしい内容と形式をそなえたものであり，かつ未公刊のものでなければならない。

6．投稿論文は編集委員会が審査し，その掲載の可否を決定する。

7．原稿の印刷において規定のページ数を超過した場合，あるいは，図版・写真などとくに費用を要するものは，その実費を執筆者の負担とする。

8．別刷は校正時に希望部数を申し出ること。実費により希望に応じる。

9．本誌の編集事務についての連絡は，「京都体育学研究」編集委員会あてとする。

10．編集委員会は理事会において編集する。

幼児におけるダンス模倣の発達的研究

古　市　久　子

Development of Dance Imitation in Children

Hisako HURUICHI

Abstact

Children acquire everything from their environments. This study investigates certain developmental aspects of dance imitation in children. The study involves a technique widely used in animation pictures where a set of pictures is quickly flipped and results in individual picture rapidly becoming a part of continuous episode. A total of 131 children, whose age ranged from two to five years old, were involved in our study. The children were tested on their imitation abilities in the dance "ENTENTANTZ". The results are as follows. In Aspect One, the children watch the dance. In Aspect Two, they show the motivation to dance. During Aspect Three, they can imitate movement accurately. In Aspect Four, they can comprehend the dance pattern. Finally in Aspect Five, they can synchronize with the tempo of the dance.

In our study we discovered that as children try to imitate dance movement, they usually imitate the movement first and not the actual rhythm. Next, children begin to comprehend dance patterns and combine accurate timing of the dance to their imitation. Based on our observation the actual sequence of dance imitation in children can be categorized in the above five aspects.

はじめに

筆者は幼児にダンスの楽しさを伝えたいと考え、その指導法を探ってきた。しかし現在は、子どもから引き出す表現・自由という言葉に翻弄されて、しかるべき指導が適切になされず、ダンスの楽しさが脇に押しやられている。平成9年に出された教育改革の『今後の幼稚園教育のあり方』で「幼児の精神的な拠り所やモデルとしての役割などの教師の役割の基本を明らかにすることが必要」と基本的視点の箇所で述べられ、身体を動かし体験することが重要視されながら、その具体的な指導法、ひいてはその指導法を導き出す研究的資料がないのが現状である。幼児の行動はほとんど模倣から始まるが、ダンスの学習は模倣の顕著な例であるのにもかかわらず、模倣は表現の神髄でないような風潮が、保育者の指導に影響を与えている。さらに、模倣は自由な発想を生む基礎、創造性を育てる機会に

大阪教育大学：Osaka Kyoiku University　4-698-1 Asahigaoka, Kashiwara, Osaka 582-8582 Japan

なっていることも十分認識されていない。そこで、本研究は幼児のダンス模倣について、まず発達的様相を調べようとするものである。

1．問題と目的

模倣に関する研究はピアジェをはじめとして、理論的に多くの著述がある。しかし、模倣に関する幼児の詳細なデータ、とくに身体表現に関するものは皆無に等しい。それは、動きが一瞬にして消えていくものであり、3次元の標記が必要であること、表現についての適切な評価方法が見いだせないことによるものと思われる。従来、行動の世界はある刺激に対して静止した瞬間の画像として取り扱われてきた。コフカ（1988）[13]は「3次元体制化を体系的に述べることは不可能である」としながらも、「動く対象を目で追うことは網膜パターンの移動によってその対象の行動的運動が生ずる」と考えて、少しずつ異なった絵を速く見ると絵が動くように見える*驚き盤運動*と、実際の運動との間には何の相違もないことが多くの研究者によって証明されたことを述べている。それを幼児のダンス模倣の場面に応用するものであるが、驚き盤運動のような微細な画像の分割ではなく、ひとつの動き（1拍分）を瞬間の1画像と考え、その一枚一枚の瞬間の画像を分析し、それをつなぎ合わせて動きという3次元の世界を解明しようとするものである。

ここで、模倣についての年齢的な発達を見る。模倣は本能に近い能力である（亀井 1982）[12]とか、出生直後から模倣能力の存在を認めている研究者もいる（Field他 1981）[4]。しかし、ギョームは模倣には何ら生得的なものはなく、模倣することを学習すると考えた[17]。そして、ピアジェは幼児における模倣を10段階に分けた。反射による準備の段階にはじまり、第2段階では活動が散発的模倣になるがこれは反射ではない（岡本 1986）[16]。第3段階になるとすでに見たことのある運動を組織的に模倣する段階で、生後7カ月の例が報告されている。第4段階は子どもが以前に見た運動を模倣する段階で視覚・聴覚・触覚・運動的なものの整合がうまく行われる（生後8～9カ月）。第5段階になると、新しいモデルの組織的模倣で、すばやくそれができるようになり、この模倣は学習の手段になるという。第6段階になると表象的模倣ができるようになり、第5段階の経験的な群性化ではなく、直接的に複雑な新モデルを模倣できるという。さらに、象徴的思考段階へと発達していくというように、周りから模倣により動きを獲得して行く様子を観察している。以上のようにピアジェ（1968）[17]は、最初は単に反射であるが、漸次進化し、モデルへの不断の同化によって獲得されるという学習の理論を展開している。本研究は、すでにモデルを模倣できつつある段階の幼児を対象にすることになるが、ダンス模倣は表現欲求に支えられて学習されるものだと考える視点にたつ。

古市他（1996年）[7]は模倣の顕著な2つの例、幼児の身体教育と武道の型習得の過程を通して、その類似点から模倣の段階を考えた。まず、模倣する対象物に対して見る・感じる行為が起き、模倣するための観察が行われ、模倣の完成に向かってその動きを繰り返し行う。そしてその過程で、あるいは一つの型が習熟されると、創造的な動きへの発展をみる。しかし、この研究は模倣の構造を過去の文献より予想したもので、実際に動きの模倣の実験は行っていず、概念的に述べているのみである。

ここで、より客観的なデータにするために調査法の問題を考えておく必要がある。古市他（1997）[8]はビデオ観察研究における抽出時の問題点について、読み取り者の人数を多くするよりも、幼児のことをよく理解し、実験に参加した実験者間の方が一致度が高いことを証明した。また、ダンス模倣の読み取りに必要な要素の確定と評価の尺度を明らかにするために行った、ダンス模倣の予備的調査（古市 1998）[9]において、そのプロセスを見るためには、動きとリズムではなく、動きとタイミングとパターンの3つの視点がより適切であることを見いだした。また、評価については、同じことを4回繰り返すので、最もSDの低い2試行目をそのデータとして採用するべきかを検討した。しかし、年齢によって試行回数による特徴があることがわかり、4試行の総計を採用するのが、1番合理的であると判断する等、読み取り方法はこの予備的研究の結果に従った。

2．調査の方法

① 被験児：大阪府柏原市法善寺保育所の男女児、2歳児31名、3歳児34名、4歳児33名、5歳児33名の計131名。

② 実験の日時と場所：1997年12月～1998年12月。園の各保育室。

③ 刺激：エンテンタンツ（あひるのダンス　＝160）を実験者が踊る。ダンスは4つの動きから成る。A. くちばしを表現したもので両手の指をぱくぱくとあひるが口を開閉するように動かす動作4回、B. 肘を曲げて脇で上下する羽の表現4回、C. アヒルが腰をぷりぷり振って歩く表現で、お尻を振りながらかがんでいってまた起き上がる、D. 立って静止し拍手4回、の全部で16拍が1パターンとなって、それを4パターン繰り返す。移動はしないで、Cの部分でかがんで起き上がるときに膝を曲げ伸ばしするだけである。

④ 手続き：年齢別の各保育室内でそのクラス全員の幼児の前で、テープレコーダから流れる刺激の曲に合わせてまず実験者が踊る。次に、説明しながら、ひとつずつの動きをゆっくり練習させる。その後、曲に合わせて実験者と一緒に踊る。ビデオに撮影した後、再生して1人で2回読み取りを行った。2回とも一致しない場合は実験に加わった他の2人を加えて評価し、3人の内2人が一致した方を採用した[8]。

⑤ 分析の方法：分析は各被検者の動きを、ひとつの表現（4拍）で区切り、それを動き・パターン・タイミングの3つの要素から点数化[10]し、できたとき2点、できないとき0点、中間を1点とした。ひとつの表現につき3つの要素があるので6点、1つの試行は4つの表現があるので各試行得点は24点となる。全部で4試行あるのでその幼児の模倣得点は94点満点となる。実験手続きと評価の仕方については表1のようである。

3．結果

(1) 模倣得点の年齢的変化

模倣得点の平均点は2歳児10.4点、3歳児32.1点、4歳児48.6点、5歳児85.9点で，年齢が増すとともに高くなる（図1）。得点の幅を見ると、2歳児0～55点、3才児0～85点、4歳児17～87点、5歳児67～95点で、3歳児が最もSDが大きく、できない幼児から上手な幼児ま

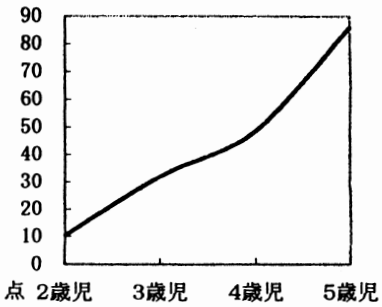


図1　模倣得点の変化

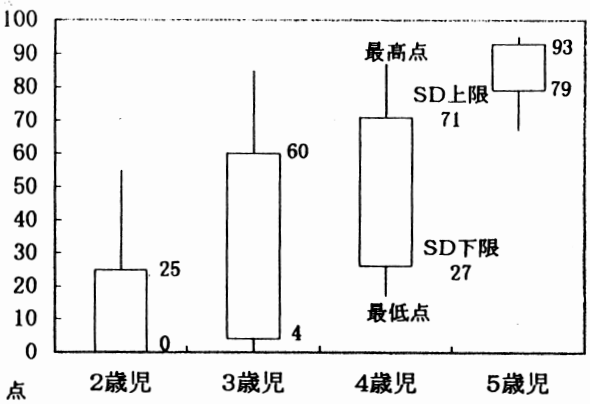
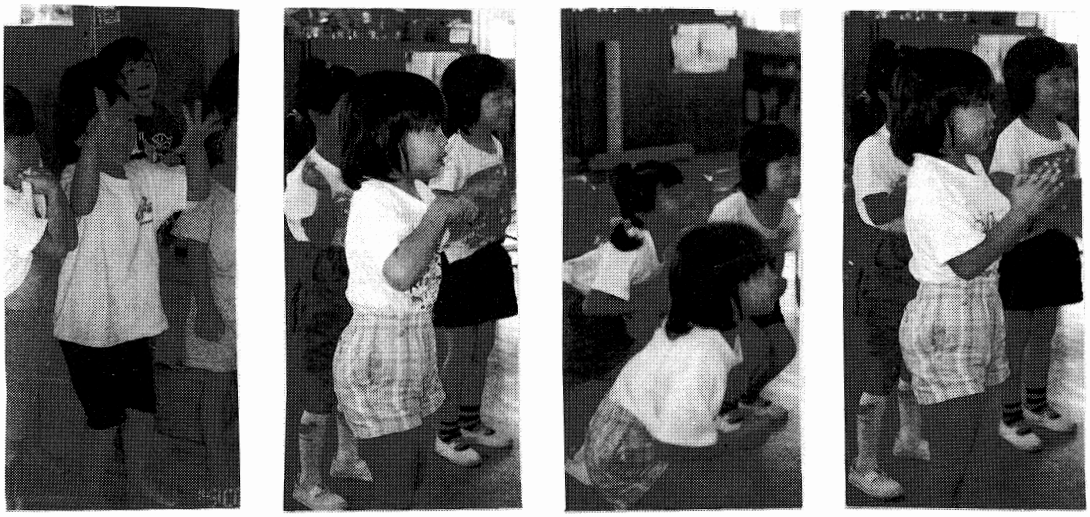


図2　年齢別得点の範囲

表1　1試行の実験手続きと得点（これを連続して4回繰り返す）

動きの順序	A. くちばし →	B. 羽 →	C. 腰振り →	D. 手を叩く →
表現とモデルの動き	両手をくちばしのようにロのところでぱくぱく開閉する	肘を曲げ胸の横でばたばた肘から動かして羽の表現をする	手は腰において腰を振りながらしゃがみまた起きてくる	手を胸の前で叩く
リズム	♩ ♩ ♩ ♩	♩ ♩ ♩ ♩	♩ ♩ ♩ ♩	♩ ♩ ♩ ♩
要素点	動き2＋パターン2＋タイミング2	動き2＋パターン2＋タイミング2	動き2＋パターン2＋タイミング2	動き2＋パターン2＋タイミング2
表現点	6点	6点	6点	6点
1試行点	24点満点			



A.くちばしの動き　→　B.羽の動き　→　C.腰を振る動き　→　D.拍手

でいる。5歳児は最もSDが低く、得点が高いところに集まっている（図2）。

(2) タイミング・パターン・動きから見た得点の変化

模倣の過程を知るためにタイミング・パターン・動きの3要素から分析した。タイミングは動きのテンポが音楽のテンポに合っているかどうかの判定をした。パターンは写真のようにくちばし→羽→腰振り→拍手の4つの表現があることと、その順番が理解できているかを見る。動きは4種類の動きが刺激の形に似ているかである。どの要素も年齢が増すとともに得点が高くなっているが、この3種類の要素の内、どの年齢も動きが最も上手くでき、次がパターンで、タイミングを合わせるのが一番難しい。そこで、動きとタイミングとパターンの傾向や方向を示す近似曲線をみると、タイミングとパターンが年齢とともに平行して増加するのに比べて、動きは勾配が少し違う傾向を示している（図3）。各要素間の相関を見ると2～4歳児は互いに相関が高かった。しかし、5歳児になるとタイミングとパターンの相関は高いが、動きと他の2つの要素とは相関が低くなっている（表2）。

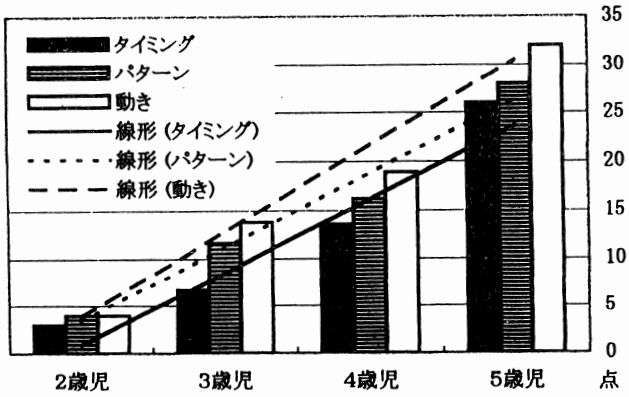


図3　各要素の年齢的変化と近似曲線

表2　5歳児の各要素間の相関係数

	タイミング	パターン	動き
タイミング		0.7690	0.3092
パターン	0.7690		0.3736
動き	0.3092	0.3736	

(3) 模倣の反応タイプから見た変化

模倣の様子を反応するタイプの違いから、図4のような6つのタイプを設定した。図の線の膨らみは、その年齢の幼児がそのタイプにどれくらいの割合の人数であるのかを示す。タイプ1はじっとしているだけでほとんど動こうとしないタイプで、2歳児の39%と3歳児の15%に見られた。タイプ2は、時々手だけ動かすタイプで2歳児の42%、3歳児の29%に見られた。タイプ3は手も身体もよく動かすが、音楽のリズムはあまり気にしないもので、2～4歳児に見られる。タイプ4は動きが4つともできて、その順序がわかりパターンの理解はできているが、タイミングが合わないタイプ

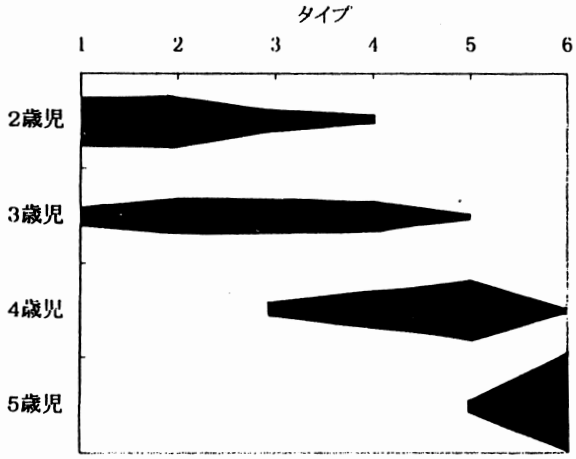


図4　模倣のタイプ年齢別

タイプ1－見ている
タイプ2－手だけ動かす
タイプ3－手も身体も動かす
タイプ4－動きが4種ともできている
タイプ5－動きに自分なりのテンポがある
タイプ6－動きが刺激のリズムにのっている

で、2歳児に2名と3・4歳児に30%近く見られる。タイプ5は動きができパターンも理解できるが、自分固有のテンポになり刺激の速さについていけず、少しづつ刺激から遅れるタイプである。タイプ6は模倣の完成に近いタイプで動きがしっかりしており、パターンの理解もあり、それがタイミングよく刺激の動きと合い、いわゆるリズムに乗って踊れているタイプである。5歳児の82%はこのタイプで、4歳児にも2人見られた。

(4) ダンス模倣のプロセスから見た各年齢の特徴

表3は各年齢の特徴的な模倣の例である。記述された言葉は観察された表現の様子で、・は動きがなされなかった箇所である。2歳児Aは音楽が鳴りモデルが提示されても、初めは座って実験者を見ていたが、次に保育者を眺め、やがて立ち上がって保育室の中を走り回った。2歳児は手を振って歩き回ったり、最後まで走っていたり、音楽が鳴り出すとぴょんぴょん跳んでいる例もある。じっと座ったままで、手だけ一生懸命振っているものや立ってはいるが手だけ動かしているものも42%である。2歳児で最も上手にできた例は26

表3　ダンス模倣の特徴的な例

刺激 ＼ 被験者の反応		2歳児A(0点)	3歳児B(17点)	4歳児C(74点)	5歳児D(95点)
		座って実験者を見る	いややと言う	実験者をじっと見る	膝で調子をとりながら待つ
1試行目	1くちばし	〃	…1回くちばし	・3回くちばし	(膝で調子をとり)3回くちばし
	2はね	座って保育者を見る	3回くちばし(遅れる)	1回くちばし・2回羽	(体で調子をとり)4回羽
	3腰振り	立つ	友達を見て笑う	・しゃがむ	しゃがむ
	4拍手	歩きながら手を振る	…手を1回叩く	・3回手を叩く	4回手を叩く
2試行目	1くちばし	〃	手を3回叩く(遅れる)	・3回くちばし	・3回くちばし
	2はね	走り回る	友達を見る	・3回羽	4回羽
	3腰振り		実験者を見る	しゃがむ	しゃがむ
	4拍手		胸の前で手を振る	4回	4回手を叩く
3試行目	1くちばし		〃	1回手を叩くと3回くちばし	・3回くちばし
	2はね		手を叩く	1回くちばしと3回羽	4回羽
	3腰振り		笑う	しゃがむ	しゃがむ
	4拍手		手を叩く	・3回手を叩く(遅れ気味)	4回手を叩く
4試行目	1くちばし		笑う	・3回羽(4拍目遅れ気味)	4回くちばし
	2はね		〃	・3回手を叩く	4回羽
	3腰振り		手を叩く	しゃがむ	しゃがむ
	4拍手		友達を見る	・2回手を叩く・	4回手を叩く
後			〃	笑う	足踏みしておもしろがる

点であったが、くちばしの表現で手がグーになっており、次の羽との区別がつきにくく、表現があいまいであるが、模倣をしようと努力している様子が見られた。

3歳児Bは始まる前は「踊るのがいやや、いやや」と言っていたが、刺激の音楽が少し遅れると大声で「はやくはやく」とせがんだ。実際に実験に入ると4回くちばしの表現を遅れ気味で行った後は、笑いと手をランダムに叩くことを繰り返していた。本人は楽しんで模倣しているつもりであるが、手足の振りが小さくてくちばしと羽の表現の区別がはっきりしないことや、ダンス以外の表現、恥ずかしがる・友達とふざける・友達を触る・笑う等がこの年齢の特徴である。

4歳児Cの模倣はじっと実験者を観察しており、1拍遅れでくちばしを4回行っているが、始まりが1拍遅れたために次々と1拍以上遅れていく。全体として動きもパターンの理解も十分できているが、刺激の音楽は4拍で次の動きに変わっていく。この速さに付いていけなくて、次の拍や小節に動きが食い込んで、少しづつ全体的に遅れていく。真似をしているように見えるが、自分で踊りやすいような動きに変えている幼児がいるのもこの年齢の特徴である。例えば腰を振ってしゃがむところは手はグーで四股を踏んでいたり、羽の部分は手をきらきらと振っていたり、しゃがむところは床に手をついてしまったりである。

5歳児Dは最も得点の高かった例で、タイミングが合って動きも大きくダンスを楽しんでいる様子が見られ、動きが大きくしっかり安定しており、パターンの理解もできている。ほとんどの幼児がダンスを模倣することができている。よくできる例はダンスに入る前から膝で調子をとっていた。

4．考察

ダンスの模倣は「見る」ことから始まり、上手にできるようになるまで次のような様相が見られた。

様相1：ダンスを観察する

2歳児の4割り近くと3歳児の15%が見ているだけである。模倣をするためにはモデルとなる行為を観察することから始まるので、ダンス模倣の初期段階といえる。動きのイメージを自分のもっているイメージに加えてファイルするためにじっと観察ていた[15]ものと思われる。「見ることは触ってしることと基本的な共通性をもっている」というなぞりアクションを例に引いて説明している佐々木（1987）[18]の考えも観察する意味に当たるかもしれない。また，走り回ったり跳んだりする2歳児が数人いた。2歳児の初期には模倣といえども、模写的なものと感覚を身体で翻訳し始めることがあるという[3]。走り回る幼児、跳びはねる幼児は音楽がなって楽しい気持ちを身体で翻訳したのではないだろうか。

様相2：模倣への意欲を示す

模倣への意欲はあるが、手だけ動かしている幼児が2歳児で42%、3歳児で29%もいる。また、手も身体も動かしてはいるが刺激を提示する実験者に同期して動かしているだけのものが、2歳児から4歳児まで見られる。私たちの身体は外界の世界を正確に写し出す鏡のような媒体であり（丸野 1992）[14]、コンドン（1976）[2]はコミュニケーションの現場で、聞き手と話し手の動きが互いに同期している「相互シンクロニー」と名づけられた同期が、模倣のキイになっていることを述べている。手や身体だけを揺する反応はいくつものことを同時にできない3歳児に特に多い（園原 1966）[19]し、動作の区別もはっきりしない。そして、3歳児で表現をしない幼児はダンス模倣と直接関係しないはにかみ等逸脱行為とも呼べるものが多く見られた。3歳に達した幼児は、親等そのふり遊びに無関係な者から目撃されることを、恥ずかしがったり嫌がったりするという（高橋 1993）[20]。加納（1966）[11]も3～6歳児を対象にした感情表出の実験で、恥ずかしそうな感情表出は5歳児よりも3～4歳児の方が顕著に認められたとしている。これは、幼児の性格、とくに恥ずかしがりはダンスの模倣表現と関係が深いことを示している（Furuichi 1997）[9]。

様相3：動きをかなり正確に真似ることができる

次に見られるのが動きの確かさである。2～4歳児に見られ、年齢とともに多くなっている。リズムに関係するタイミング・パターンの理解に比して非常に得点が高いのは、身体そのものをモデルの形に似せる『ふり』を真似るだけでよいからである。「ふり遊び」は幼少のころから現れる（麻生 1992）[1]という。ダンスが「ふり遊び」と違う点は即興的だということである。即

興的とはリズム感覚に関係してくることである。それは幼児の心的感覚で構成されるもので、視覚的な動きの形より難しかったことが考えられる。動きとタイミング・パターンの相関は5歳児になると低くなり、運動能力が分化してくるのであろう。

様相4：パターンの理解ができる

4歳児の模倣は明らかにパターンの理解と動きがしっかりしてくる。が、動きが刺激の速さについて行けなくて遅れ気味になる幼児が多い。パターンの理解ができていれば、タイミングが合えばいつかは完全なリズム反応へと導かれる（古市 1971）[5] ので、動き表現はほとんどできている4歳児のダンス模倣の問題は筋肉的な学習の問題である。また、動きがあいまいであったり、一部分を自分で変えたりしていく幼児もいる。これは、リズムに関するパターンの理解とタイミングを合わせるということに注意が向くと、動きへの注意が希薄になるからであろうと思われる。

様相5：タイミングが合う

3歳児はリズムへの同期ができる年齢である（古市 1971）[5] が、動きが加わるとリズムへの同期は遅れる。5歳児の模倣についてほとんどの幼児がダンスを模倣することができた。5歳児ではダンスが始まる前に身体等でリズムをとって身構えているものが多く、動きに入る前から幼児の心の中で全体像がイメージされていたのであろう。リズム反応の実験を行った古市（1973）[6] は手のタッピングにおいて3～6歳児のリズム反応の同期と予期を調べた研究で、予期反応が優れた幼児は同期反応が優れていることを述べている。

幼児のダンス模倣はまず、見ることから始まる。2歳児ではじっと観察し、見ている内に、同期していき自然と身体の一部が動く。次に表現の形が模倣される。表現のパターンが理解できると、今度はそれを音楽に合わせようと努力がなされ、5歳になると、タイミングが合うようになり、ほぼダンスの模倣表現ができるようになることがわかった。これらの様相は発達の段階として設定するためには、刺激の種類を変えて調べる必要があり、今後の課題としたい。

おわりに

ダンスにおいて最初の模倣学習はゆっくりとリズムを考えないで動きを練習し、次に動きのパターンを理解させ、タイミングを合わせていくことが有効ではないかという方向性をみることができたことは、指導の理論付けを得ることになった。模倣の対象に対する教師自身の価値観は幼児自身の知覚に影響を及ぼすことは避けられない[3] とすれば、動きのモデルを提示する先生自身の手本をより正確にする必要がある。そして、年齢の発達的段階を知った上で、保育で目標とするものを明確にしていくことが必要であろう。そして幼児が模倣への努力をする過程で創造的な意欲が発展していくことを期待するものである。

引用文献

1）麻生武（1992）身振りからことばへ．新曜社，P.375.

2）Condon,W.S. (1976) An analysis of behabioral organization. Sign Language Studies, 13, PP.285-318.

3）ディモンドシタイン，G著　穴迫洋子・林信恵訳（1981）幼児のためのダンス授業．ベースボール・マガジン社，P.11.

4）Field,T.M. Woodson,R. Greenberg,R. & Cohen,D. (1981) :Discremination and imitation of facial expression by neonates. Science, 218, PP.179-181.

5）古市久子（1971）Rhythm反応における発達的研究の検討と実験．音楽学，17，PP.294-106.

6）古市久子（1973）幼児のリズム反応における同期と予期．奈良女子大学文学部研究年報，16，PP.115-144.

7）古市久子，横山勝彦（1996）身体学習における『模倣』の構造－幼児教育と武道の技能獲得過程の類似点を通して－．大阪教育大学紀要第Ⅳ部門教育科学，451，PP.59-72.

8）古市久子，遠藤晶，松山由美子（1997）ビデオ観察研究におけるデータ抽出時の問題点について．大阪教育大学紀要　第Ⅳ部門教育科学，45，(2) PP.263－277.

9）Furuichi,H. (1997) :Dance imitation,child rearing attitudes and child personality. EDUCARE (Department of Early Childhood Education in Osaka Kyoiku University) 17, PP.1-6.

10）古市久子（1998）幼児におけるダンス模倣の過程について．大阪教育大学紀要第Ⅳ部門教育科学，46，(2) PP.193－206.

11）加納真美（1996）幼児の緊張場面での表出について．発達心理学会7回大会発表論文集，P.44.

12) 亀井秀雄（1982）身体・表現のはじまり．れんが書房新社，PP. 14-15.
13) コフカ，クルト著　鈴木正彌監訳（1988）ゲシュタルト心理学の原理．福村出版，P. 323.
14) 丸野俊一（1992）動作の模倣と学習　現代のエスプリ．至文堂，PP. 103-112.
15) 中沢和子（1979）イメージの誕生．ＮＨＫブックス，P. 114.
16) 岡本夏木，ピアジェ，J.（1979）発達の理論をきずく（村井潤一編　別冊発達4）ミネルヴァ書房，PP. 147-149.
17) ピアジェ，Ｊ著　大伴茂訳（1968）模倣の心理．黎明書房，PP. 181 − 194.
18) 佐々木正人（1987）からだ・認識の原点．東京大学出版会，P. 33.
19) 園原太郎，黒丸正四郎（1966）3歳児．ＮＨＫ出版，P. 28.
20) 高橋たまき（1933）幼児のふり遊びの世界．ブレーン出版，P. 54.

（1998年5月25日受付、10月28日受理）

ノルベルト・エリアスにおけるスポーツ

坂　　なつこ

A Study on Sport and the Social Theory in Norbert Elias

Natsuko SAKA

Abstract

Over the past few years a considerable number of studies have been published on Norbert Elias's studies of sports. What seems to be lacking, however, is the close connection between his interest in violence and his social theory. Thus, at first, the author considers the relationship between Elias's the 'threshold of violence in the civilising process' and his studies of sports. Secondly, the author analyzes his concepts of the 'civilising process' by focusing on 'figuration'. This leads to the conclusion that Elias's works show not only one special sociological approch toward sports, but also the necessity of sociogenetic perspective in this field of reserch.

【はじめに】

スポーツに見られる近年の様々な変化にともない、スポーツの社会学的研究においても、従来とは異なった視座や方法が求められるようになってきている。

そこでは、菊幸一の指摘にみられるように、「複雑化、錯綜化する近・現代を読み解く鍵としての『身体』に着目し、そこにおける文化や、近代スポーツの意味を汲み取ろうという視点」が生成しているのを見ることができる[1]。

このような動向が生まれる背景には、スポーツが、メディアによる大衆化、商品化によって、従来の体育や競技スポーツという枠組みを越えて、市民文化として浸透しつつある状況をあげることができるであろう。スポーツは様々な文化と結びつくことによって、社会的、政治的に新たな意味を生み出す場になっており、マス・メディアの介在によりその契機はいっそう増幅されつつある。このような変化を捉え、スポーツの今日的意味を解いていくためには、新たなスポーツ認識とともに、よりいっそう社会的文脈と関連させながら、スポーツ、身体、身体文化を捉える理論的枠組みが必要となっている。

欧米では、すでに80年代から、同様に生じたスポーツの変化を受け、ブリティッシュ・カルチュラル・スタディズやエリアス学派、P．ブルデュー（Pierre Bourdieu）らの枠組みを用いた、新たなスポーツの理論的模索が開始されている[2]。その中でも、N. エリアス（Norbert Elias）は、すでに60年代に、歴史的、社会発生的なスポーツ研究を試みたことから、今日のヨーロッパ、特にイギリスのスポーツ研究において強

立命館大学大学院，社会学研究科博士後期課程：Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University
56-1, Tojiin-Kitamachi, Kita-ku, Kyoto 603-8577 Japan

い影響を持つに至っている。

日本においても、スポーツに関するエリアスの言説は注目されるようになってきており、多木浩二、亀山佳明、菊幸一などに、その強い影響を見ることができる[3]。エリアスに関するこのような注目は、今日、日本のスポーツにおいて生起している変化を背景としていることはいうまでもない。だが、何より「スポーツに関する知識は社会に関する知識である」とするエリアスのスポーツについての視座と、情動と社会構造を総合する独特の理論構成に、スポーツの変化を分析しうる可能性が見いだされているからに他ならないだろう[4]。

しかしながら、このような可能性を含みつつも、日本においてエリアス理論のスポーツ研究に関する可能性については、未だ十全に展開されているわけではなく、その途についたにすぎないといえ、その掘り下げが現代スポーツの解明に必要なものとなっている。

このことから本稿では、エリアスのスポーツ研究と、とりわけ彼の主著である『文明化の過程』にみられる独自の歴史観に基づく社会学理論との関連を考察し、エリアスの理論におけるスポーツの位置づけを明らかにすることを試みる。特にここでは、多木らの諸説を批判的に検討することを通して、従来のエリアスのスポーツ論の理解においては、暴力衝動の側面が強調され、社会変動としての「文明化」論が見落とされているという点を示すこととしたい[5]。

1．スポーツと「文明化」

ここでは、多木浩二のエリアス認識とH.P.デュル(Hans Peter Duerr）による文明化論批判を検討することによって、エリアスの「文明化」論の把握の問題点を示し、そのような理解は、エリアスのスポーツ研究を「暴力衝動の抑制」に限定することにつながっていることを明らかにする。

（1）多木浩二のエリアス認識

多木は、現代社会におけるスポーツが、さまざまな意味合いを含んでいることに着目する。スポーツは意味のない気晴らしの娯楽ではなく、「一方では近代固有のナショナリズムを乗り越えているが、他方では新たなナショナリズムを生み出してもいる」[6]。多木は、スポーツにはそのような矛盾した言説が集まることに注目し、そのことの解明が現代社会の「資本制」という強大なシステムを説き明かすカギになるのではないか、とする。

このため、多木は、エリアスがスポーツを社会との関係で読み解こうとした点に着目する。エリアスが「スポーツがいかに一つの政治的文化的社会において人間活動の表象として成立してきたかを発見した」ことを評価し、「歴史家として、スポーツがイギリスで発生する過程とイギリスの議会制度の発生とが、同時代的かつ同質的な関係にあることを指摘しているのは卓見というべきであろう」としている[7]。

しかし、他方で、エリアスのスポーツ研究は近代スポーツの発生においては有効であるが、現代スポーツの分析にとってはその可能性は見られないとして、エリアスのスポーツ研究の限界も指摘する。それは、第一に、エリアスは競争の非暴力化を無意識のうちに国内に限っていたこと、第二に、現代社会でスポーツ活動の加熱を促している力について、ほとんど考慮していない点をあげている[8]。

第一の点について、多木は、エリアスが国内の平和化しか語らず、そのため現代スポーツが抱えているナショナリズムの問題、すなわち諸国家の間での競争という側面が、エリアスのスポーツの枠組みにおいては捉えられないとしている。

第二の点については、様々な活動の総体としての社会において、スポーツとはその一部をなすものであると考えるならば、「他の多様な要素との関係からスポーツに作用してくる巨大な社会の力を捉え、また多様な力によって動くスポーツが、諸要素の関係としての社会をそれまでとは違った状態に変化させる作用を及ぼす過程として把握し直さねばならないのである」とする[9]。

だが、第一の批判に関しては、多木は次のことを見逃しているといえる。すなわち、エリアスが、20世紀の間にスポーツは「国家間の非暴力的、非軍事的な競争形態の象徴的なあらわれとして機能を果たすようになった」と指摘している点である[10]。エリアスは、スポーツという文化の歴史的展開を、一国内においてのみ想定しているのではないだろう。そのことは、エリアスが『文明化の過程』において、国家形成過程と情

動の変化を、ヨーロッパの諸国間の「編みあわせ(Verflechtung)の秩序」というダイナミクスのもとで考察していることからも明らかである[11]。「編みあわせの秩序」について、エリアスは、次のように述べている。「人間の相互依存のなかから全く特殊な秩序、それを作った個々の人間の意志や理性よりもはるかに強制力を持つ力強い秩序が生まれてくる。歴史的変化の歩みを規定するのはこの編みあわせの秩序であり、文明化の過程の根底に横たわっているのはこの秩序なのである」[12]。このような秩序のもとで、エリアスは、「礼儀」や「文明化された振る舞い」といった形であらわれる人々の情動の変化とヨーロッパの国家形成過程との関連を捉えているといえる。だが、多木の分析においては、「文明化の過程」が「歴史的モデル」としてのみ理解され、スポーツの発展を分析するための社会理論とは捉えられていないために、エリアスによるスポーツの歴史的展開の分析を一国内に限定することにつながっているといえる。従って、多木の論点には、諸個人の「情動抑制」と国家形成としてみられる社会変化との動態的な接合というエリアスの試みが、抜け落ちてしまっているのである。

このことは、多木の批判する第二の点にも通じている。「編みあわせ」の具体的な仕組みの考察が、『文明化の過程』における国家形成過程であり、エリアスのスポーツ研究の目的であった。ここでもまた、エリアスの「フィギュレーション(figuration)」としてあらわれる、社会変動の力学が理解されていないといえる[13]。

多木が、エリアスのスポーツ研究を社会構造と情動抑制の関係の考察において注目したことは意義のあることであるが、エリアスが「文明化」論において社会変動の力学を明らかにしようとしたことは見落とされていると考えられる。そのことによって、近代スポーツの発生においては有効であるが、現代スポーツの分析にとってはその可能性は見られないとして、エリアスのスポーツ研究を限定的に捉えてしまっているのである。

(2)デュルによる「文明化」論批判

同じように、「文明化の過程」の、社会変動の側面を見落とし、単線的、進化論的「暴力抑制」の過程と捉える立場は、デュルにおいて端的に見られる[14]。デュルは、エリアスの「文明化」についてのとらえかたが全く進化論的な、ヨーロッパ文明礼讃の思想であるとして「エリアス学派」への批判を展開している。デュルが、エリアス学派を「エリアスとその一派」とあらわし、かれらの文明化論の説明を、「中世人や最近の《未開》社会の人々は、われわれ今日のヨーロッパ人と比べて、その衝動や情感がまだあまり制約されたり、制御されたりされておらず、衝動の断念は重要ではなく、感情を押さえるのはわりと取るに足らないことであった」と理解しているところに、エリアスの文明化論に対するデュルの感情的な誤解が表れている[15]。デュルの目的は、このような「文明化過程の神話」を崩し、「四万年も遡れば、野蛮人も未開人も非文明人も原始民族もなかった事実を隠していること」を明らかにすることであり、「自分の裸を恥ずかしく思うのは、この裸が歴史的にどう定義されているにせよ、人間の本性なのである」ということを理解されるようにすることである[16]。

しかしながら、エリアスの「文明化」への焦点は、「文明」によってヨーロッパを価値的に評価しているということを意味するのではない。「文明」がヨーロッパにおいて表していたものは何か、また「文明化」とはいかなる意味においてヨーロッパで用いられて来たのか、という問題関心に由来するものであった[17]。それはどのような「社会的からみあい」によって形成されるのだろうかという問いになるのである[18]。このようなことから、例えば「文明化」の起源となる「礼儀」が表現しているものを、エリアスは宮廷社会という「社会の状況であり、自意識であり、性格である」とするのである[19]。「文明化の過程というのは人間の行動や感情のある特定の方向への変化」と述べるように、一定方向への漸次的な推移ということが意味されているが、デュルのいう価値的な「良い方向」への発展として捉えているのではない[20]。

この点においてデュルは、エリアスの「文明化」の問題設定を読み取っていないといわざるをえない。エリアスは、それぞれの社会においてどのような基準のもとで情感が抑制されたり発散されたりしたのかという点に焦点を置いていたのであり、どのような社会の圧力/編み合わせのもとで抑制や禁止条項が存在した

りつくられたりしたのかという点を明らかにしようとしたのであった。

2．エリアスにおけるスポーツ

以上見てきたように、「暴力抑制」としてのスポーツは、確かに「文明化の過程」においてあらわれるのであるが、その前提となるのは、エリアスの社会を動態的に捉える視点であり、「フィギュレーション」として表現しているものである。多木やしばしば引用されるデュルにおいても、その前提とされる「フィギュレーション」についての理解が欠落しており、それゆえ、複合的な社会変動という視点を欠いた「暴力抑制」論へとスポーツ理解を限定しているといえる。

では、「文明化の過程」と「フィギュレーション」を軸として、エリアスはどのようにスポーツを論じていくのだろうか。

ここでは、ダニングを中心とするエリアス学派のスポーツ研究をカルチュラル・スタディズとA. ギデンズ(Anthony Giddens)の枠組みを用いて、批判的に検討しているD. ジェリー(David Jary)とJ. ホーン(John Horne)に依拠して、エリアスにおけるスポーツの位置づけを明らかにする。

（1）フィギュレーションと「文明化の過程」

ジェリーとホーンは、エリアス学派の視点の基軸となるのは、第一に、「人間の関係構造、フィギュレーション」という概念であり、第二に、「文明化の過程」という概念であるとする。前者は、スポーツの焦点を社会学的な参照枠に確保するものであり、後者は、スポーツが体系的な分析を受ける際の一般的な歴史的モデルを提供しているとする[21]。

第一のフィギュレーションという概念は、軋轢や矛盾をも含む人々の相互依存の網の目をあらわす。ここでは、人間は、どのような意味においても「自律した個人」としてではなく、「開かれた個人」すなわち「諸個人」としてあらわれる。このことは、社会学における「社会と人間」という硬直した二元論的関係にたいし、エリアスが人間を「相互依存する存在」と理解し、「社会的存在としての人間」を動態的に捉え直そうとしたことを示している[22]。第二の「文明化の過程」は、社会的、内面的抑制が増大していくという歴史的世俗化の傾向、また暴力の統制やマナーが段階的に変化していくという傾向、さらに自然からの全般的距離化によって構成されている[23]。ジェリーとホーンは、文明化の過程との関係から、エリアスの捉えるスポーツ・レジャーについて以下のようにまとめている。一つは、「フィギュレーション」としてあらわれる社会的相互依存と近代国家形成の過程による社会発展のプロセスは、行動の外面的、内面的抑制を強め、スポーツ・レジャーにもその過程は反映されるということである。二つ目は、現代のスポーツには、情動の抑制や社会のなかでの暴力制御の要求の強まりが反映されているという点である。しかし、他方で、スポーツは、「文明化の過程」によって人々が受けている抑圧や緊張に対する対抗手段として機能するとする。

以上のことから、ジェリーとホーンは、エリアス学派のパラダイムが理論的、経験的に徹底して、社会学的分析の焦点を社会構造と個人との相互関係におくことによって、スポーツやレジャーの社会学的分析の発展に貢献していると指摘している[24]。

このような点は、エリアスによるスポーツの理論的、経験的な分析、たとえばイギリスにおける「狐狩り」の歴史的展開についての研究にみることができる。エリアスは、18、19世紀イギリスの「狐狩り」の発達が、「スポーツ」として知られるタイプの娯楽と、そのような特徴を欠いていた初期の娯楽を区別する構造的な特徴を、きわめて明確に示しているとする[25]。初期の時代には、狐狩りは現実的な快楽、すなわち「獲物を殺して食べる快楽」のための楽しみであった[26]。しかし、狐狩りはイギリスにおいて、独自の組織や習慣を持つきわめて特殊化された娯楽になる。狐を殺すことではなく、追いつめる過程が重要になるのであり、それが意味するものは、「すばらしい競争であり、緊張であり、興奮であり、フリカンドー（肉料理）」ではなくなるのだ[27]。狩りそのものの緊張感を持続させ、緊張と解放、抑制と快楽の「新しいバランス」とそのドラマティックな展開を重視するようになるのである。そのような「娯楽のスポーツ化」は、「社会構造」との関連でいえば、イギリスの議会制民主主義を発展させた人々の「政治における妥協」という行動様式と、同様の自己抑制を要求するのである[28]。また、エリアスは、暴力の

感受性が増大した例を、ボクシングの発展に見ている。他の多くの肉体的競技と同様、拳をそのまま使う戦いは、最初に武器として足を使うことを排除するという一定の強い規制のもとに置かれるイギリスにおいて、スポーツの特徴を帯びたとする。エリアスは、このような「娯楽のスポーツ化」が、『文明化の過程』において明らかにされた「行動と感情の一般的な法則と同じ方向」への発展であるとしている[29]。このような圧力の発生が、「フィギュレーション」としてスポーツ化の過程をうながしたと、エリアスは主張するといえるだろう。

（2）社会発生論的スポーツ研究という視点

だが、ジェリーとホーンは、このようなエリアスの見解が「文明化の過程」の概念から生じている「潜在的な」機能主義と進化論主義であるとして、批判している。

確かに、エリアスの暴力に対する問題関心は、彼の理論の底流をなしているものであるといえる。だが、見てきたように、文明化の過程は単純に暴力の抑制を強化する過程としてあるのではない。そのように見える暴力の抑制・情感の抑制も、関係的、相対的にさまざまな状況でとらえられるものである。エリアスは「国家形成と個人的道徳意識形成、身体的暴力の許容範囲、嫌悪感を覚えずに身体的暴力を行使できるあるいは見物できる心理的限界－こうしたものは、異なる発展段階にある社会では、その社会特有の諸関係のもとにあるのだから、違ったものになると考えられる」として、暴力のあらわれを関係論的な見地のもとでとらえている[30]。このようにとらえるならば、エリアスの文明化論が価値的で限定された暴力抑制・情感抑制ではなく、また機能主義的な位置づけとも異なることが理解されるだろう。

エリアスのスポーツ研究の焦点は、「社会的に許容された肉体的暴力の表現のための飛び地」という表現にみられるように、スポーツによって人々はいかにして肉体的な損傷の危険を少なくさせながら、楽しい興奮を経験しているか、という点にある[31]。スポーツは「肉体の行使や技をともないながらも、その過程でだれかが重傷を負う可能性を最小限に減らす闘争の開放的な興奮を人々に与えてくれる」のであり、かつての「本当の戦争」は、種々のルールを伴った「模倣的」戦争にかわるのである[32]。

それはどのような社会にあらわれるのか。巨大な人間関係の網の目、つまり相互依存の網の目が複雑かつ長大になる、「文明化の過程」にある社会においては、人々の情感や行動は極端なものから極端ものへの変化ではなく、より均一に発現するようになる。すなわち「社会の網が細分化するにつれて社会発生的、心理的自己抑制装置もより細分化し、より多面的になり、より安定してくるのである」[33]。ここで情感の発露は「洗練され合理化された形で、合法的でかつ綿密に限られた特定の位置を占めている」のであり、「戦闘欲・攻撃欲は、たとえばスポーツ競技において、社会的に公認された形で顕現する」のである[34]。そのような社会においては、エリアスが「スポーツ」の発生にとって重要な役割を果たすとする「暴力に対する感受性」が、より敏感になるのである。そうなってはじめて、「スポーツ」という形で人は競技を楽しむことができるようになるのである[35]。

初期の大著である『文明化の過程』において、エリアスは、西欧における「文化」と「文明」の対立に着目し、この対立から生じる「『文明化』された行動様式」とは、ヨーロッパの自意識を表していることを示した[36]。ここでエリアスは、ヨーロッパ近代の緊張に満ちた人間関係の在り方を見ていったといえる。大規模な「上流社会」をもってはじめて生じる、巨大な人間関係の網の目、つまり相互依存の網の目が複雑かつ長大になる社会において新たな人間関係の在り方が見られ、そこから新たな人々の行動様式が形成されるのである。ここで「文明化の過程」とは、エリアスにとって社会変化のある法則性、力学でもあることが見て取れる。「社会という場全体」の変化としてあらわされるのである。ここでは、人々の関係の在り方は、テンション・バランス（tension-balance）であらわされるのであり、エリアスにおいては、この諸個人の間にあるバランスもしくは関係が権力概念と関わらせて捉えられていくのである[37]。

このような捉え方のもとで、エリアスはスポーツの発展のなかに『文明化の過程』において明らかにした、社会構造の変化と諸個人の情感の抑制（表現）の変化

の法則と同じ方向への発展を見いだす。例えば、エリアスは「『スポーツ』と呼ばれるイギリス式娯楽」が世界的な普及をみるのは、「この種の娯楽は明らかにこの時期に多くの国々で必要とされた余暇の欲求に一致していた」からであるとする[38]。「『スポーツ』という肉体の行使が重要な役割を果たす娯楽の特殊な形態」は、イギリスで最初に発展し、世界中に広がったのである[39]。「スポーツ」とは、ある社会構造の形成過程において生成した、一つの余暇の形態と捉える。このような理解から、それぞれの時代における余暇や、各々の社会を形成する人々がどのような余暇を求めるのかといった研究の可能性が導かれるのであり、ここに、エリアスが試みたように、スポーツの社会発生論的研究の可能性が見いだせると考えられるのである。

【おわりに】

以上のように、エリアスは社会の総体からスポーツを捉えようとしたのであり、そこにはしばしば誤解される単なる進化論的な暴力抑制の文明的昂進という見方とは異なった、よりダイナミックな社会変化の過程と関わらせてスポーツを捉える視点が存在する。

エリアスの理論が可能性を持っていると考えられるのは、人間の情動に注目し、その変化を社会構造の変化との関連において、動態的に捉えようとした点にあるだろう。そのうえで、多木がエリアスの情動抑制とスポーツとの関係に着目し、現代スポーツの特徴を「近代的タイプのエキサイトメント」に求めていることは、意義深いことといえる。

エリアスは、「編みあわせ」や「フィギュレーション」によって、諸個人が織り成す社会の関係構造の変化や過程、ダイナミクスを浮かび上がらせる。エリアスにおいて「スポーツ」を考える際に、「文明化の過程」において諸個人が織り成す「フィギュレーション」としてあらわれる、「社会という場の全体」の変化の総体を捉えることが重要であるだろう。その点に、変動する現代社会において人々が求めるスポーツとは何か、という問題を考える可能性があるといえる。

エリアスのいう「フィギュレーション」である人々の相互依存の網の目は、現代社会においては、ますます広範囲にわたり緊密化している。そのなかでスポーツは、プレイヤーによる競技という側面だけではなく、大衆化、商品化とともに、ますますメディアや観客の欲望が結びつき、うみだされる社会的、政治的な場として肥大化しつつある。そのため、現代社会におけるスポーツを考えることは、それらの「場の全体」を問うことであり、現代社会における文化の意味や、人々の情動を含めた構造を捉える重要な契機であると考える。

【註】

1）菊幸一「エリアス派スポーツ社会学と身体／Body」日本スポーツ社会学会編『スポーツ社会学研究』第5巻、法政大学出版局、1997年、15頁。

2）主としてイギリスのバーミンガム大学の現代文化研究センター（CCCS: The Center for Contemporary Cultural Studies）を中心としてすすめられた、現代文化やポピュラーカルチャーについての諸研究は、一般的な文化研究との区別から、ブリティッシュ・カルチュラル・スタディズ（BCS: British Cultural Studies）と呼ばれている。これらの研究については、以下を参照のこと。J．ホーン、山下高行訳「ブリティッシュ・カルチュラル・スタディズとスポーツ・レジャー社会学」、および棚山研「ブルデュー社会学とスポーツ研究の可能性」、ともにD．ジェリー／清野正義他編『スポーツ・レジャー社会学－オールターナティヴの現在』道和書院、1995年に所収。

3）多木浩二『スポーツを考える－身体・資本・ナショナリズム』ちくま新書、1995年、亀山佳明「スポーツの現代化と身体性の社会学」『岩波講座社会学第4巻　身体と間身体の社会学』、菊幸一（前掲書）、池井望「フィギュレーション社会学と近代スポーツ－N．エリアス論－」日本スポーツ社会学会編『スポーツ社会学研究』第3巻、1995年。

4）Elias, Norbert/Eric Dunning, *Quest for Excitement*, Blackwell, 1986, p.19.（大平章訳『スポーツと文明化　興奮の探求』法政大学出版局、1995年、27-28頁）

5）岡田も、方法論的側面からこのことに言及している。岡田猛「N．エリアスにおける課題としてのスポーツ」体育・スポーツ社会学研究編『体育・ス

ポーツ社会学研究８　スポーツの社会的意味を探る』道和書院、1989年。

6）多木、前掲書、20頁。

7）同上書、14-13頁。

8）同上書、188-189頁。

9）同上書、189-190頁。

10) Elias/Dunning (1986) p. 23.（前掲訳書、33頁）

11) この点でいえば、多木は、エリアスが、文明化の過程における国家形成の過程を租税と暴力（警察及び軍隊）の独占において捉えた点を見逃しているといえる。N.Elias, *Über den Prozeß der Zivilisation* 2, Frankfurt/M, 1969.（波田節夫他訳『文明化の過程・下』、法政大学出版局、1978年）特に、「文明化のための見取り図」を参照のこと。「Verflechtung」については、註の13を参照のこと。

12) Ebenda, S. 332.（同上訳書、334-335頁）

13)「Verflechtung」および「Figuration」は、ともに社会における人々の相互依存関係をあらわす、エリアスの中心的な考えである。「Verflechtung」は、「ネットワーク形成」とも訳されているが、エリアスは人々や諸集団、諸構造の相互依存関係における、過程性及びダイナミクスに焦点をあてていることから、より動態的で一般的な「編みあわせ」という訳を本論では用いている。また「Figuration」には、これまで「図柄」「関係構造」「形態」など邦訳書によって異なった訳語があてられている。このことは、「Figuration」が後期になってから概念化されたものであることや、それが意味する、まさに網の目や織物の図柄のような人々の相互依存関係のダイナミクスや歴史的変動を、一語であらわすことの難しさが示されている。そのため、本稿では「フィギュレーション」としてカタカナ表記に変更している。エリアス理論を深めるためにも、概念及び訳語について今後さらに検討する必要があるであろう。N.Elias, *Über den Prozeß der Zivilisation* 1, Frankfurt/M, 1969（波田節夫他訳『文明化の過程・上』法政大学出版局、1977年）の序論、N.Elias, *Was ist Soziologie?*, JUVENTA, 1996(8.Aufl.),［徳安彰訳『社会学とは何か』法政大学出版局、1994年］を参照のこと。

14) Duerr, H.P., *Nacktheit und Scham Der Mythos vom Zivilisationsprozeß*, Band Ⅰ ,Suhrkamp,1988.（藤代幸一／三谷尚子訳『裸体と恥じらいの文化史』法政大学出版局、1990年）

15) 同上書、１頁。

16) 同上書、４頁。

17) Elias (1969), Vorwort.（前掲訳書、「序文」）を参照のこと。

18) Ebenda, S. LXXVIII.（同上訳書、62頁）

19) Ebenda, S. 65.（同上訳書、140頁）

20) Elias (1969), S.312.（前掲訳書、333頁）この点について、クリューガーも参照。Michael Krüger, Zur Bedeutung der Prozeß- und Figurationstheorie für Sport und Sportwissenschaft. zum 100 Geburtstag von Norbert Elias, -in: *Sportwissenschaft*, 27. Jahrgang Heft 2, 1997（坂なつこ／有賀郁敏訳「スポーツ及びスポーツ科学に対するプロセスーフィギュレーション理論の意義についてーノルベルト・エリアス生誕100年によせてー」『立命館大学産業社会論集』第34巻1号、1998年）

21) Jary, David/John Horne, The Figurational Sociology of Sport and Leisure of Elias and Dunning and Its Alternatives, *Society and Leisure*, vol. 10, 1987.（山下高行訳「スポーツ・レジャーにおける図柄社会学ーエリアス、ダニングとそのオールターナティブ」『立命館文学』vol.536、1994年、211頁）以上の議論は、ダニングらエリアス学派からの批判を受けて、次の論文においてさらに展開されている。J. David/Horne, J., *The Figurational Sociology of Sport and Leisure Revisited*,（市井吉興／坂なつこ訳「スポーツ・レジャー研究におけるフィギュレーション社会学再論」清野正義他編『スポーツ・レジャー社会学』道和書院、1995年）ダニングらの反批判は、Dunning, E. /Chris Rojek, *Sport and Leisure in the Civilizing Process*, Macmillan, 1992. を参照。

22) Elias (1969), LXVII.（前掲訳書、50頁）

23) ジェリー／ホーン、213頁。

24) 同上訳書、681頁

25) Elias/Dunning (1986), p.25.（前掲訳書、35頁）

26) *Ibid.*, p.161.（同上訳書、233頁）

27) *Ibid.*, p.160.（同上訳書、232頁）このような「楽し

みの先延ばし」による「興奮の探求」が、必ずしも、「勝つこと」で達成されるわけではなく、競技そのものの長くて楽しい興奮に重点が置かれるという変化が、イギリスにおける「フェアプレイ」の精神、「グットルーザー（good loser）」といったエートスに表れているとされる。Fletcher, Jonathan, *Violence and Civilization An Introduction to the Work of Norbert Elias*, Plity Press, 1997, p.107.

28) ここで注意しなければならないのは、エリアスはその関係を因果関係として捉えているのではないということである。Elias/Dunning (1986), p.40.（前掲訳書、56頁）

29) *Ibid.*, p.21.（同上訳書、30頁）

30) N.Elias, The Genesis of Sport as a Sociological Problem, E.Dunning(ed.), *The Sociology of Sport; A Selection of Readings*, London, 1971.（桑田禮彰訳「スポーツと暴力」栗原・今他編『身体の政治技術』新評論、1986年）

31) Elias/Dunning (1986), p.90.（前掲訳書、130頁）

32) *Ibid.*, p.165.（同上訳書、239頁）

33) Elias (1969), S.319f.（前掲訳書、340頁）

34) Ebenda, S.280.（同上訳書、388頁）

35) Elias/Dunning (1986), p.27.（前掲訳書、39頁）

36)「文化」と「文明化」については、Elias (1969), Erstes Kapitel; Zur Soziogenese der Begriffe "Zivilisation" und "Kultur"（前掲訳書、第一章「ドイツにおける『文化』と『文明化』の対立の社会的発生について」）を参照。

37) テンション・バランスについては、Elias/Dunning (1986) p.115.（前掲訳書、166頁）

38) *Ibid.*, p.128.（同上訳書、185頁）

39) *Ibid.*, p.150.（同上訳書、217頁）

【参考文献】

1) Duerr, Hans Peter (1985) , *Sedna oder die Liebe zum Leben*, Suhrkamp.（原研二訳（1992）再生の女神セドナ．法政大学出版会．）

2) Dunning, Eric (1986), The Sociology of Sport in US:Critical Observations from an Eliasian Perspective,C.Rees & A.Miracle(eds.) *Sport and Social Theory, Human Kinetics*.（菅原禮監訳（1991）スポーツと社会理論．不昧堂．）

3) Dunning, E. /Kennth Sheard (1979), *Barbarians, Gentleman and Players*, Martin Robertson and Company Ltd.（大西鉄之祐　大沼賢治訳（1983）ラグビーとイギリス人．ベースボール・マガジン社．）

4) Elias, Norbert (1983), *Engagement und Distanzierung*, Suhrkamp.（波田節夫他訳（1991）参加と距離化．法政大学出版局．）

5) Elias, Norbert (1989), *Studien über die Deutschen, Machtkämpfe und Habitusentwicklung im 19. und 20. Jahrhundert*, M.Schröter (Hrsg.), Suhrkamp.（青木隆嘉訳（1996）ドイツ人論文明化と暴力．法政大学出版会．）

6) Featherstone, Mike (1987), Norbert Elias and Figurational Sociology: Some Prefatory Remarks, *Theory, Culture & Society*, Vol.4, No.2-3.

7) Grupe, Ommo (1987), *Sport als Kultur*, EDITION INTERFROM, Zürich, Osnabrück.（永島惇正，岡出美則　市場俊之訳（1997）文化としてのスポーツ．ベースボール・マガジン社．）

8) Hopf, Wilhelm (1981), *Soziale Zeit und Körperkuitur*, Lit.

9) Huizinga, Johan (1939), *Homo Ludens*.（高橋英夫訳（1990［初版1973］）ホモ・ルーデンス．中公文庫．）

10) 亀山佳明編（1990）スポーツの社会学．世界思想社．

11) MaIntosh, Peter (1987), *Sport in Society*, revised edition, West London Press.（寺島善一，岡尾恵市　森川貞夫編訳（1991）現代社会とスポーツ．大修館書店．）

12) Mennell, Stephen (1989), *Norbert Elias an introduction*, Blackwell.

13) 日本スポーツ社会学会編（1998）変容する現代社会とスポーツ．世界思想社．

14) 体育・スポーツ社会学研究会編（1991）新しい体育・スポーツ社会学を目指して．体育・スポーツ社会学研究10．道和書院．

（1998年8月31日受付、10月28日受理）

資　料

黎明期における女性陸上競技および女性中長距離・マラソンに関する略年表

岡　尾　惠　市

The Shortened Chronological Table of the Early Years of Women's Athletics, especially Middle-distance, Long-distance Running and Marathon

Keiichi OKAO

Abstract:

The development of world women's athletics is remarkable in recent years. But it is not accomplished in a single day. It is nothing but the effort of sportig women's forerunners, who had been looked down, criticized and impeded by many sportsmen over a long time to stand on their own feet and to carry out women's athletic meetings successfully in a male-dominated soprts society.

This shortened chronological table shows the history of the development of women's athletics, especially of middle-distance, long-distance running and marathon events and the records from the late 19th century to today.

＜はじめに－問題の所在と研究課題＞

近年の女性の陸上競技選手たちの樹立する記録の水準の高さには驚かされる。1998年段階での女性選手たちの出している世界記録は、1936年の「オリンピック・ベルリン大会」当時から戦後の1950年代に出された男性の世界記録に匹敵するとともに、日本記録と比べるならば、いくつかの例外を除けば1964年の「オリンピック・東京大会」当時の男性選手たちの出した記録に匹敵する水準に達してきている。

また、男女間の記録の比率をみると、「近代オリンピック」に女性の陸上競技種目がはじめて採用された1928年の「オリンピック・アントワープ大会」当時の男性の世界記録を100％とすると、女性の競技力は、走種目のうち100ｍ競走が85.2％、800ｍ競走は80.8％、走高跳は78.3％、走幅跳は75.7％であったものが、1998年段階の世界記録比較では、100ｍ競走は93.4％、800ｍ競走は89.3％、走高跳は85.3％、走幅跳は84.0％であり、とくに長距離について見てみると10000ｍ競走では89.62％、マラソン競走は90.1％となり、ほぼ男性の90％の水準に到達してきていることがわかる。

こうした世界レベルの女性競技者による記録の飛躍的進展は、女性の身体的特性の研究に立脚した科学的トレーニング方法の急速な進歩にもよるが、より大きな要因として、今日世界に普及・発展した「陸上競技」を愛好する数千万人という女子選手たちの存在があってはじめて成就されたものと考えられる。

しかし、世界の陸上競技界にとって「女性の陸上競

立命館大学経済学部：Department of Economics, Ritsumeikan University　1-1-1 Noji-Higashi, Kusatu, Siga 525-8577 Japan

技」が組織として公然と活動を開始するのには幾多の「茨の道」を歩んできたことを忘れてはならない。男性の近代陸上競技は、1850年代の英国にその萌芽が見られ、1860年代の後半には「規則」が整備され、組織が確立して、ほぼ今日と同様な姿を現わすが、女性の競技は19世紀末までその出発を待たねばならなかった。しかも、当初は「女性が競技をする」ということに対して、男性の側からの蔑視や非難・妨害が多々あり、1920年代に入って当時の女性たちは「女権獲得・選挙権獲得」等の運動と連動させながら、組織を創って立ち向かう中から今日の活動の基礎を築いてきた。

筆者は、1920年代以降今日まで約80年間にわたって男性に「追いつけ追い越せ！」と「男性のミニコピー」の形を取りながら歩を進めてきた「女性陸上競技」が、21世紀に入ってもその路線を継承・発展させていくべきか、それとも「女性独自」の種目や内容の陸上競技を創出していくべきかについての考察を試みようとしている。

本研究は、その糸口をつかむために、まず今日までの女性の陸上競技の歩み、とりわけ近年、進境の著しい女子中長距離およびマラソンがどの様な歩みをしてきたかを改めて整理し、上記の課題を検討するために作成したものである。

黎明期における女性陸上競技および初期の女子中長距離・マラソンに関する略年表

＜古代オリンピア＞	一般に女性の入場は禁止デメター（農業女神）司祭の尼僧のカミネのみ、オリンピア競技場内で見学を許可される
＜スパルタ＞ （リュクルゴス時代）	オイノマオス王の娘のヒッポダメイアの婿探しを起源とする（初回にはクロリスが優勝したといわれる）女神「ヘラ」を崇めてのエリスの16人の尼僧が審判となり女子競技を行なう キートンを着て500オリンピック・フィート（約160 m）の短距離競走を行なう 勝者にはオリーブの冠と仔牛の肉が与えられ、自像の建立が許可された
＜ＢＣローマ時代＞	ピシアン、イストミアン、ネメアで女子短距離競走実施
＜ＡＣローマ時代＞	イストミアンでヘデラが戦場馬車で走行
・・・・・・・	・・　・・　・・　・・　・・
1710年代	『Spectator紙』に英国バースでのWakeに老若男女の参加する運動会の記事掲載
1826年	『Everyday Book』に地方の運動会に女子の賭け競技開催の記事
1832年4月	『The spirit of the Times』にアメリカで女子の「賭け長距離競走」が行なわれたとの記事掲載
1877年4月27日	ニューヨークの「Mechanical Hall」で12時間以内に80kmを走る「賭け競走」が行なわれ、M・マーシャル嬢が優勝して50ドルを得た
1878年	A・アンダーソン夫人がニューヨーク・ブルックリンにある「Mozalt Hall」での賭け競走で675時間（28日3時間）に1086kmを走破
同　年	E・カペル夫人はシカゴでの「賭け競走」で3000時間（125日間）に750マイル（約1207km）走破
1879年4月	同4月12日付の『国家警察公報（The National Police Gazette）』に「Gilmore's Garden」で行なわれた6日間にどれだけ歩けるかの「賭け試合」があり、M・フォン・グロスが372マイル（596km）を走破し1000ドルを得たとの記事掲載
1886年7月6日	『The New York Times』に「第20回ブルックリン・カレドニアン・クラブ大会」に、6人が出場する女子220Ｙ競走が実施され、B・エドワード嬢が優勝

黎明期における女性陸上競技および女性中長距離・マラソンに関する略年表

1895年11月9日	米国ニューヨーク州ポキプシーのヴァエサー大学で「Field Day」の名の下に、初の「女子の陸上競技大会」を開催（100Y・200Y・120YH・走高跳・走幅跳・ﾊﾞｽｹｯﾄﾎﾞｰﾙ球投）開催
1896年4月27日	「第1回近代オリンピック」（於アテネ市）の「マラソン競走」女性のメルポメーネが隠れて出場、4時間半で走破（非公認扱い）
1903年	女性の手になる女性競技者のための書『女性のための運動と屋外スポーツ（Athletics and Out-door Sports for Women）』出版、第1章はC・ターヒューン著の「陸上競技（track and field）」、第2章はボストン陸上競技クラブ所属のウエルズリー大学のコーチ、H・ホルトン著の「ランニング」
1903年5月30日	同日付の『モントクライアー・タイムズ』紙に、前日の29日に行なわれたニュージャジー州の女子生徒向けのパムリコ高校の陸上競技大会での50Y競走でG・ギファンが7秒0で優勝等の記録掲載（当日の実施種目（50Y・75Y走・8ﾎﾟﾝﾄﾞ砲丸投・走高跳・走幅跳・300YR）
1906年9月	同月付の『The American Physical Education Review』誌に「米国高校トレーニング協会」第1回会議で、協会は女子陸上競技を承認しない」との決議がなされた報告を掲載
1910年10月	同月付の『The American Physical Education Review』誌に米国の小学校女子学童向けの陸上競技大会の状況についての記事掲載
1913年	スエーデンのエーテボリで女子生徒のための陸上競技会開催
1913年	フィンランドで女子陸上競技大会開催1000m3分26秒5等の記録が残っている
1917年	仏の「婦人参政論者（suffragette）」のA・ミリア夫人が「フランス女子スポーツ連盟（FFSF）」を結成
1917年4月	オーストリア陸上競技連盟に「女子部」設立を決定、「ウイーン・フットボール・クラブ」と「ドナウ女子水泳クラブ」の協力で陸上競技大会を開催
1917年	スエーデンで「女子体力章検定」国内で424回実施
1918年4月21日	米国カリフォルニアで「サンフランシスコ電話郵便会社（The San Francisco Call and Post）」主催による「第1回女子クロスカントリー・ハイキング大会」（距離7マイル・177名が出走）実施、E・ヒックマン嬢が1時間18分48秒で優勝、観衆3000人
1918年7月27日	「第1回オーストリア女子陸上競技選手権大会」開催（100m・400m・走高跳・走幅跳・円盤投・砲丸投）
1918年	「ウイーンFC」はブタペストに女子選手派遣し「対抗戦」実施
1918年	「ドナウ女子水泳クラブ」はミュンヘンに女子選手派遣し「対抗戦」実施
1919年	「ドイツ陸連」に女子部創設
1919年	「英国陸軍陸上競技選手権大会」の番外種目に女子440Y競走導入
1919年	「FFSF」は「IOC」にオリンピック大会に女子陸上競技種目を導入する様に提案
1919年	英国「第1回北部陸上競技選手権大会」でヨークシャーのバートン選手がスパイクを履いて短パンツで100Y走に優勝
1920年9月	「ウイーン対ベルリン女子対抗陸上競技大会」開催
1921年1月	英国では「国際女子陸上競技大会」派遣のために予選会開催
1921年3月10日	「5カ国対抗女陸上競技大会」モンテカルロで開催（仏・英・伊・ｽｲｽ・ﾉﾙｳｴｰ）が参加
1921年10月30日	「英仏対抗女子陸上競技大会」パリで開催（ﾗｲﾝｽﾞ選手は100Yを11秒8で走る）
1921年10月31日	ミリア夫人がパリのサル・プセ会館に関係者を集め、「国際女子スポーツ連盟（FSFI）を設立、（加盟国は英・米・仏・伊・ﾁｪｺ・ｽﾍﾟｲﾝ）

1921年10月	「ベルギー女子スポーツ連盟」50人で創立
1921年	第1回「ドイツ女子陸上競技選手権大会」開催（100m・4×100mR・走幅跳・5kg砲丸投）
1922年初頭	「英国女子陸上競技連盟」（WAAA）創設
1922年4月	「第2回国際女子陸上競技大会」モンテカルロで開催（ﾍﾞﾙｷﾞｰ・ﾃﾞﾝﾏｰｸが加わり合計8か国が参加）
1922年5月27日	東京キリスト教女子青年会主催で「女子連合競技大会」御茶ノ水の女高師で開催、参加者は85名
1922年8月18日	「第2回FSFI総会」パリで開催（英・米・仏・ｽｲｽ・ﾁｪｺ・ｷﾞﾘｼｱが出席）
1922年8月20日	「第1回女子オリンピック（Women's Olympic Games）」パリのペルシャン競技場にて開催、観衆は2万人、国別対抗形式、参加国（英・米・仏・ｽｲｽ・ﾁｪｺ）、実施種目（60Y・100Y・300m・1000m・100YH・440YR・走高跳・走幅跳・砲丸投・やり投）
1922年8月27日	「ロンドン・ブリュッセル・パリ3クラブ対抗女子陸上競技大会」ブリュッセルのパルク競技場で開催
1922年11月	大日本体育同志会が主催して「第1回全日本女子陸上競技選手権大会」開催、315名が参加
1922年12月	「全米アマチュア競技連盟（NAAF）」結成、女子部局長に米国商務長官夫人フーバーが就任
1923年1月	「米国アマチュア競技連合（AAU）」は女子が陸上競技種目に参加することを巡って討論、水泳・体操競技と同様登録を許可
1923年4月	「第3回国際女子陸上競技大会」モンテカルロで開催、参加6か国
1923年	英国の女子大学関係の大会を管理・運営する組織として「女子大学陸上競技連盟（WIUAB）」創設
1923年8月18日	「第1回英国女子陸上競技選手権大会」ロンドン郊外のブロムリーのオクソ・スポーツ競技場で開催
1923年9月29日	「第1回全米女子陸上競技選手権大会」米国ニュージャージー州のニューアークのウィーカヒック公園で開催、開催種目（50Y・100Y・60YH・440YR・走高跳・走幅跳・8ﾎﾟﾝﾄﾞ砲丸投・円盤投・やり投・ﾊｽｹｯﾄ球投・野球用球投）
1924年6月15日	健母会・中央運動社・毎日新聞社の主催で「第1回日本オリンピック」大阪市立運動場で開催、3府13県から1800名が参加
1924年7月3日	「第7回IAAF総会」パリで開催、「IAAF」自体が女子用の競技規則を早急に制定して、傘下に入れて女子の陸上競技全般を掌握することを決定
1924年7月31日	「第3回FSFI総会」パリで開催、（参加国はﾍﾞﾙｷﾞｰ・ｶﾅﾀﾞ・仏・英・伊・ﾘﾄｱﾆｱ・ｽｲｽ・ﾁｪｺ・ﾕｰｺﾞ）女子用の競技規則を策定、「IAAF」の傘下に入ることを決定
1924年8月4日	「6か国対抗女子陸上競技大会」ロンドンのスタンフォード・ブリッジ競技場にて開催、観衆25000人集まる、7つの世界新誕生
1925年6月6日	「英国女子クラブ対抗陸上競技大会」で4種目に世界新誕生
1925年6月11日	「英国女子陸上競技選手権大会」開催
1925年7月31日	「英・加・チェコ3か国対抗女子陸上競技大会」ロンドンのスタンフォード・ブリッジ競技場で開催
1925年	「カナダ女子陸上競技連盟」結成

黎明期における女性陸上競技および女性中長距離・マラソンに関する略年表

1925年	スエーデンは英国女子チームを招待してエーテボリとファルケンボルグで「2カ国対抗」開催
1925年10月28日～11月3日	「第2回明治神宮競技大会」で人見絹枝選手2種目に優勝
1925年11月22・23日	「第12回全日本陸上競技選手権大会」に女子種目登場、実施種目（50m・100m・200mR・400mR・走高跳・三段跳・8ﾎﾟﾝﾄﾞ砲丸投）
1925年	S・C・エリオット・リン『女性陸上競技（Athletics for Women and Girls）』女子選手の立場からの著書発刊
1926年10月3日	「ロンドン・ポリテクニック・ハリアーズ・マラソン」でV・ペルシーが3時間40分22秒で走破
1926年5月	新設の奈良県美吉野運動公園競技場で「第3回日本女子オリンピック」を開催
1926年7月8日	人見選手シベリア鉄道経由で渡欧、エーテボリに向かう
1926年8月5～8日	「第8回IAAF総会」オランダのハーグで開催、女子問題の特別委員会設置を決定、「IOC」に対して1928年の「オリンピック・アムステルダム大会」から女子種目を登場させてほしいとの要望書を提出
1926年8月27～29日	「IOC」から「オリンピック」の名を削除する様に迫られ、「第2回国際女子大会（2nd International Ladies Game）」の名に改称して開催、人見選手走幅跳で世界新など2種目優勝を含む6種目に入賞して「会長特別賞」を受賞
1926年8月29日	「第4回FSFI総会」エーテボリで開催、以後は「IAAF」との接点を見出すために「合同技術委員会」を設置すること、1930年に「第3回国際女子大会」をプラハで開催すること、具体的な女性用の「競技規則」等を確定した
1926年10月3日	「ロンドン・ポリテクニック・ハリアーズ・マラソン」にV・ピアシが挑戦、3時間40分22秒で走破
1926年12月28日	「IAAF理事会」パリで開催、8月の総会で決めた1928年の「オリンピック・アムステルダム大会」で女子5種目（100m・800m・400mR・走高跳・円盤投）を実施することについて採決した結果、仏・独・ｽｴｰﾃﾞﾝ・ﾁｪｺ・ﾎﾟｰﾗﾝﾄﾞの委員は賛成、英国は反対した
1928年1月8日	「IAAF理事会」アムステルダムで開催、将来ともオリンピックで女子種目を実施していくこと、10種目を行なう方向で「技術委員会」が検討することを決定
1928年7月28日～8月12日	「オリンピック・アムステルダム大会」開催、女性種目は5種目日本からは女性選手として人見選手が唯一人参加、800mで2位入賞し「銀メダル」を獲得、（女子陸上競技出場選手数・独19・米19・ﾍﾞﾙｷﾞｰ14・ｵﾗﾝﾀﾞ14・仏13・加6・伊6・ｽｴｰﾃﾞﾝ6・ﾎﾟｰﾗﾝﾄﾞ5・ｵｰｽﾄﾘｱ3・ﾊﾝｶﾞﾘｰ3・ﾗﾄﾋﾞｱ・ﾘﾄｱﾆｱ・ﾙｰﾏﾆｱ各2・ｵｰｽﾄﾗﾘｱ・ﾁｪｺ・ｴｽﾄﾆｱ・日本・ﾆｭｰｼﾞｰﾗﾝﾄﾞ・南ｱﾌﾘｶ・ｽｲｽ各1、[英国はﾎﾞｲｺｯﾄ]、21カ国121名が参加
1928年8月2日	「オリンピック・アムステルダム大会」初採用の800mでL・ラドケ・バッチャウアー（ドイツ）2分16秒8の世界新で優勝
・・・・・・・	・・　・・　・・　・・　・・
1952年6月15日	キエフでの大会の800mでN・オトカレンコ（ソ連）が2分08秒5の世界新記録を樹立（初めて2分10秒の壁を破る）
1958年7月4～5日	米国モリスタウンでの「全米女子選手権」で880Y競走実施、F・マッカードルが2分26秒7で優勝

1958年7月27～28日	モスクワでの「米ソ対抗陸上」で800m競走実施
1960年9月8日	「オリンピック・ローマ大会」に800m復活、L・シェフツォワ［旧姓リセンコ］（ソ連）2分04秒3の世界新で優勝
1963年	「GANEFO大会（新興国競技大会）」で申金丹（朝鮮民主々義共和国）800mで1分59秒1の世界新を出したが「IAAF」の公認の大会でないとされ未公認に終る
1963年12月16日	M・レパー（米）はカリフォルニア州のカルバーシティーでのマラソンに出て3時間37分07秒で走破
1964年5月23日	D・グレイグ（英［スコットランド］）は英国ライドの大会で3時間27分45秒で走破
1964年7月21日	オークランドの大会でM・サンプソン（ニュージーランド）は3時間19分33秒の記録樹立
1966年4月19日	「第71回ボストン・マラソン」に米国マサチューセッツ州のR・ギブが隠れて出走し、3時間21分40秒で完走
1967年4月19日	同上大会でR・ギブが3時間27分17秒で優勝、K・V・シュバイツァーは「健康証明書」を提出しゼッケン261を着けて4時間20分2秒で完走
1967年5月6日	M・ウイルトン（加）トロントの大会で3時間15分22秒の記録樹立
1967年6月3日	ロンドンでの「英国女子選手権」でA・スミス（英）、1500mで4分17秒3の世界新記録樹立（正式公認第1号）
1967年9月16日	西独ワルドニールのマラソン大会でA・ペーデ（西独）3時間07分26秒2の記録樹立
1967年10月24日	M・ゴメルス（オランダ）1500mで4分15秒5の世界新記録更新
1969年9月20日	アテネでの「欧州陸上選手権」でJ・エヘリチコバ（チェコ）1500mに4分10秒7の世界新記録樹立
1970年12月	16才のC・ウオーカー（米）オレゴン州シーサイドのマラソン大会で3時間02分53秒の記録樹立
1971年5月9日	フィラデルフィアのマラソン大会でE・ボナー（米）3時間01分42秒の記録樹立
1971年8月31日	豪のヴィクトリア州ウエリビーのマラソンコースでA・ビームス（豪）が2時間46分30秒の女子マラソン世界最高で走破（初めて3時間の壁をを破る）
1971年7月11日	シュトゥットガルトの大会でH・ファルク（西独）800mで1分58秒5の世界新記録樹立（初めて公認で2分の壁を破る）
1972年4月19日	「第77回ボストン・マラソン」では女子選手の出場を正式に認可
1972年9月9日	「オリンピック・ミュンヘン大会」初採用の1500mでL・ブラギナ（ソ連）4分01秒4の世界新で優勝
1974年7月6日	英国ダーラムの大会でL・ブラギナ（ソ）は3000mに8分52秒8の世界新記録樹立（正式公認第1号）
1975年7月26日	わが国初の女子マラソン選手須藤令子（札幌女子短大）が「網走湖畔マラソン」出場して、4時間07分40秒で走破
1976年8月7日	米国カレッジ・パークでの「米ソ対抗陸上」でL・ブラギナ（ソ連）は3000mに8分27秒12の世界新記録更新
1979年	プエルトリコのサン・ノセでの「IAAF総会」において3000mを84年の「オリンピック・ロサンゼルス大会」から正式種目とすることを決定
1979年10月22日	「ニューヨーク・マラソン」でG・ワイツ（ノルウエー）2時間27分32秒6の記録を樹立

黎明期における女性陸上競技および女性中長距離・マラソンに関する略年表

	（初めて２時間30分の壁を破る）
1979年11月下旬	ポーレン国際陸連会長が東京で初開催の「第１回東京国際女子マラソン大会」を見学し、84年の「オリンピック・ロサンゼルス大会」から「女子マラソン」を正式種目とすることを表明
1981年７月11日	オスロの大会の5000ｍでＩ・クリスチャンセン（ノルウエー）は15分28秒43の世界新記録樹立（正式公認第１号）
1981年８月７日	モスクワの大会の10000ｍでＯ・クレンツェル［結婚後はボンダレンコ］（ソ連）は32分30秒80の世界新記録樹立（正式公認第１号）
1983年１月23日	「全国都道府県対抗女子駅伝競走大会」京都で始まる
1984年６月28日	Ｉ・クリスチャンセン（ノルウエー）はオスロの大会で5000ｍで14分58秒89の世界新記録樹立（初めて15分を割る）
1984年８月５日	「オリンピック・ロサンゼルス大会」で初の「女子マラソン」実施、Ｊ・ベノイト（米）が２時間24分52秒で優勝
1984年８月10日	同大会で初採用の3000ｍでＭ・プイカ（ルーマニア）が８分35秒96で優勝
1985年４月21日	「ロンドン・マラソン」でクリスチャンセン（ノルウエー）は２時間21分06秒の世界最高記録を樹立（98年度まで破られず）
1985年７月27日	オスロの大会の10000ｍでＩ・クリスチャンセン（ノルウエー）は30分59秒42の世界新記録樹立（初めて30分台に入る）
1988年９月30日	「オリンピック・ソウル大会」に初採用の10000ｍでＯ・ボンダレンコ（ソ連）が31分05秒21で優勝
1993年９月13日	王軍霞（中国）は北京の大会の10000ｍで29分31秒78の世界記録を樹立（初めて30分の壁を破る）
1996年７月28日	「オリンピック・アトランタ大会」に初採用の5000ｍでは王軍霞（中国）が14分59秒88で優勝
1998年４月19日	「第18回ロッテルダム・マラソン」でＴ・ロルーペ（ケニア）は２時間20分47秒の記録を樹立［男女並走レース］、13年振りに世界最高記録を更新

＜引用文献＞

1）秋葉尋子（1978）『体育・スポーツの歴史　第９章』（日本体育社）

2）Cumming J.『Runners and walkers:a 19th century sports choronicle』(Regnery Gateway)

3）Drinkwater Barbara.L,(Ed.)(1986),『Famale Endurance Athletics』(Human Kinetics Pub.Inc.)

4）Foldes E.(1964),『Woman at Olympic』(the traditional Olympic Academy, Report of the 4th Session)

5）Gibb Roberta　『The First Woman to Run Boston』(Rnnne's World June1978)

6）Higdon Hal (1995),『A Century of Running Boston--celebrating the 100th Anniversary of the Boston Athletic Association Marathon--』(Rodale Press,Inc.)

7）Jonson Anne Janette (1996),『Great Women in Sports』(Visible Ink Press)

8）岸野雄三他編(1973),『近代体育スポーツ年表』（大修館書店）

9）岸野雄三他編(1987),『最新・スポーツ大事典－資料編』（大修館書店）

10）Lovett Charlie (1997),『Olympic Marathon--A centennial History of the most Storied race』(Praeger)

11）岡尾惠市(1990),「イギリスにおける近代陸上競技規則成立の経過－1860年代以降を中心に－」(『保健・体育研究』

立命館大学人文科学研究所紀要別冊第7号）p79～99
12）Palæologos K.著・鈴木良徳訳（1982），『古代オリンピア英雄伝』（ベースボール・マガジン社）
13）Quercetani Roberto L.(1990),『Athletics--A History of Modern Track and Field Athletics (1860-1990) Men and Women』(Athletic Today)
14）Remley M.L.(1984),『The Steelengraving lady and the Gibson girl:The American sportwoman in tradition;1880～1910』(The paper of 12th Annual Convention of North American Society for Sport History)
15）Shearman Montague (1887),『Athletics and Football』(Longmans,Green and Co.)
16）Simri U.(1977),『A historical analysis of the role of women in Olympic games』
17）Theodorakopoulos Yannis (Ed.)(1997),『Panathinaikon Studium A 2300 Year Long History』(the Central Organizing Committee of the 6th World Championships in Athletics)
18）Tricard Louise Mead (1985),『American Women's Track and Field A History,1895 through 1980』(McFarland)
19）Webster F.A.M. (1930),『Athletics of To-Day for Women』(Frederic Warne & Co.,Ltd)
20）Webster F.A.M.著・宮原治、森田俊彦訳(1937)，『オリンピク競技史』
21）1960～1998,(財)陸上競技連盟『年次陸上競技ルールブック』（あい出版）
22）1963～1998,『陸上競技マガジン年度付録記録集』（ベースボール・マガジン社）
23）1966～1998,『月刊陸上競技付録年度記録集』（講談社・陸上競技社編）
24）雑誌『月刊陸上競技1998年1月号・1999年1月号』（陸上競技社）

＜参考文献＞

1）Boutilier Mary A. & Giovanni Lucinda San (1983)The Sporting Woman. Human Kinetics Publishers.
2）Davis Michael D.(1992)Black American Women in Olympic Track and Field. McFarland.
3）Eliott-Lynn Spophie C.(1925)Athletic for Women and Girls. Robert Scott.
4）Gerber Ellen W.他(1974)The American Woman in Sport. Addison-Wesley Pub.Co..
5）Guttman Allen他(1984)Essays on Sport History and Sport Mythology. Texas A&M Univ.Press.
6）Guttman Allen (1991)Women's Sports A History. Columbia Univ.Press.
7）Gynn Roger (1984)The Guinness Book of the Marathon. Guinness Superlatives.
8）Hargreves Jennifer A.(1994)Sporting Females--Critical Issues in the History and Sociology of Women's Sports. Routiedge.
9）Heinonen Janet (1989)A Complete Guide Running for Women. Sports Illustrated.
10）人見絹枝（1929)スパイクの跡．平凡社.
11）人見絹枝（1930)ゴールに入る．一成社.
12）Johnson Anne Janette (1996)Great Women Sports. Visible Inc..
13）Mandell Richard D.(1984)Sport A Cultural History. Columbia Univ.Press.
14）三橋義雄（1924）女子競技．東京廣文堂書店.
15）日本陸上競技連盟70年史編集委員会編(1995)日本陸上競技連盟70年史．ベースボール・マガジン社.
16）織田幹雄，戸田純編著(1983)炎のスプリンター．山陽新聞社出版局.
17）小原敏彦(1990)人見絹枝物語．朝日新聞社.
18）岡尾恵市(1994)近代女子陸上競技成立の過程．立命館文学第536号.
19）岡尾恵市(1996)陸上競技のルーツをさぐる．文理閣.
20）Pope S.W.(Ed.)(1997)The New American Sport History--Recent Approaches and Perspectives--. Univ.of Illinois Press.
21）Theodorakopolos Yannis & Luzenfichthr Alain(1997)Marathon--History & Statistics-. 6th IAAF World Championships in Athletics. C.O.C..
22）Wilson Neil他著(1982)The Marathon Book --A Practical Guide--. Virgin Books.
23）Young David C. (1996)The Modern Olympic. The Johns Hopkins Univ.Press.

（付記）
本研究は平成8年～10年度文部省科学研究費＜基盤研究C（2）課題番号08680147＞の補助を受けたものである。

（1998年8月31日受付、12月27日受理）

会　員　名　簿

（付会則）

平成10年12月現在

京都体育学会

京都体育学会会則

昭和27年7月5日　制定施行
昭和37年6月9日　改正
昭和41年6月6日　改正
昭和49年4月1日　一部改正
昭和54年4月1日　一部改正
昭和55年4月1日　一部改正
昭和60年4月1日　一部改正
昭和62年4月1日　一部改正
平成5年4月1日　一部改正
平成10年4月1日　一部改正

1．総　　則

1．この会を京都体育学会（Kyoto Society of Physical Education）と称する。この会は日本体育学会京都支部を兼ねる。

2．この会は体育に関するあらゆる科学的研究をなし，体育学の発展を図り，体育の実践に寄与することを目的とする。

3．この会に専門分科を置くことができる。

2．会　　員

4．この会は前条の目的に賛同する研究者をもって組織する。

5．会員は正会員および購読会員とする。正会員には学生会員をおくことができる。正会員になるには正会員の紹介と理事会の承認を要する。

3．機　　関

6．この会の運営は次の機関による

(1) 総　会　(2) 役員会　(3) 理事会

7．通常総会は毎年1回これを開き，当日の出席会員をもって構成する。
総会は正会員中より役員として会長（1名），副会長（2名），理事（若干名）および監事（2名）の選出を行うほか，役員会の提出する重要事項を議決する。
総会は会長が招集する。

8．本会は総会の承認をえて，顧問を置くことができる。

9．役員会が必要と認めた場合，または会員の要求があって理事会が適当と認めた場合には，臨時総会を開くことができる。

10．役員会は会長（会長事故があるときは副会長）がこれを招集し，会の運営方法を審議する。

11．理事会は理事長および会計理事（2名）と庶務理事（1名）を選出する。理事会は会務を処理する。

12．役員の任期は2ケ年とする。ただし重任を妨げない。

13．総会および役員会の議事は出席者の過半数をもって決する。

4．事　　業

14. この会の目的を達成するために次の事業を行う。

(1) 学会の開催　(2) 研究会，講演会等の開催

(3) 機関誌「京都体育学研究」の刊行

(4) その他この会の目的に資する諸事項

15. 研究会は毎年１回以上これを開き，研究成果の発表を行う。

16. 機関誌「京都体育学研究」の編集は編集委員が担当する。

5．会　　計

17. この会の経費は次の収入によって支出する。

(1) 会員の会費　(2) 事業収入　(3) 他より助成金および寄附金

18. 会員の会費は年額次の通りとする。

(1) 正会員年額　2,000円　(2) 学生会員年額　1,000円　(3) 購読会員年額　1,000円

19. この会の会計年度は毎年４月１日より翌年３月末日とする。

6．附　　則

20. この会の事務局は原則として理事長の所属する学校に置く。

21. この会の会則は総会の議決により変更することができる。

22. この会則は，平成10年４月１日から実施する。

京都体育学会事務局

〒606-8501　京都市左京区吉田二本松町

京都大学総合人間学部　環境適応論講座

中 村 栄太郎　研究室

Tel. 075-753-6886　Fax. 075-753-6734

郵便振替口座番号　01070-7-23829

加入者名　京都体育学会

＊退会・転出・転入・通勤先変更・転居等については，日本体育学会事務局へ直接届けると共に，京都体育学会事務局へもご連絡ください。

京都体育学会役員

顧問	川畑愛義	(京都大学名誉教授 日本生活医学研究所)	
	未利博	(京都教育大学名誉教授)	
	万井正人	(京都大学名誉教授 京都造形芸術大学)	
	竹内京一	(京都教育大学名誉教授 奈良産業大学)	
	山田敏男	(京都工芸繊維大学名誉教授)	
	蜂須賀弘久	(京都教育大学名誉教授 神戸女子大学短期大学)	
	倉敷千稔	(同志社大学名誉教授 神戸女子大学)	
	伊藤稔	(京都大学名誉教授)	
会長	田口貞善	(京都大学)	
副会長	藤田登	(同志社大学名誉教授)	
	八木保	(京都大学名誉教授)	
理事	岡尾恵市	(立命館大学)	
	大山肇	(京都外国語大学)	……会計理事
	小田伸午	(京都大学)	……庶務理事
	小島広政	(京都産業大学)	
	佐藤尚武	(滋賀大学)	
	田淵和彦	(同志社大学)	
	中村栄太郎	(京都大学)	……理事長
	野原弘嗣	(京都教育大学)	
	浜崎博	(京都薬科大学)	……会計理事
	森谷敏夫	(京都大学)	
	山下謙智	(京都工芸繊維大学)	
監事	田坂登紀夫	(同志社大学)	
	寺田光世	(京都教育大学)	

京都体育学会専門分科会規程

昭和41年　制定
昭和42年　一部改正
昭和43年　一部改正
昭和49年　一部改正
昭和54年　一部改正
昭和58年　一部改正
昭和62年　一部改正

1．体育に関する専門分野の研究推進のため，京都体育学会（以下本会という）会則第3条の規定によって専門分科会（以下分科会という）を置く。
2．分科会は原則として，専門分野を同じくする10名以上の本会会員をもって組織し，世話係を選出する。
3．分科会は世話係および分科会会員名簿を本会会長に提出し，役員会の承認をえて成立する。
4．分科会は，年数回その専門分野について研究会を開き，その成果を毎年支部学会において報告しなければならない。
5．各分科会には本年より年6,000円を補助する。

専門分科会	世話人	連絡先
発育発達	中村栄太郎	京都大学総合人間学部（TEL 075-753-6886） 〒606-8501　京都市左京区吉田二本松町
運動生理	小田伸午	京都大学総合人間学部（TEL 075-753-6876） 〒606-8501　京都市左京区吉田二本松町
バイオメカニクス	野村照夫	京都工芸繊維大学繊維学部（TEL 075-724-7741） 〒606-8585　京都市左京区松ケ崎御所海道町
体育社会・心理	横山勝彦	同志社大学（TEL 0774-65-7510） 〒610-0394　綴喜郡田辺町多々羅都谷1-3
体育指導	浜崎博	京都薬科大学（TEL 075-595-4675） 〒607-8414　京都市山科区御陵中内町5
体育原理・体育史	岡尾恵市	立命館大学（TEL 075-464-1111） 〒603-8577　京都市北区等持院北町
体育経営管理	中比呂志	京都教育大学（TEL 075-644-8280） 〒612-0863　京都市伏見区深草藤森町1

会　員　名　簿

（※日本体育学会に所属しない会員）

氏　名	勤務先	所在地	自宅住所	所属分科会
青井　洋	木津市立仰木の里小学校	〒520-0245 大津市仰木町4-15-8 ☎0775-72-1028	〒520-0525 滋賀郡志賀町小野1045-5 ☎0775-94-3283	
青木作衛	栗東町立金勝小学校	〒520-3005 滋賀県栗太郡栗東町御園911-1 ☎0775-58-0150	〒520-3013 滋賀県栗太郡栗東町目川533 ☎0775-52-3104	社会・心理
青戸公一	京都薬科大学	〒607-8414 山科区御陵中内町5 ☎595-4675	〒612-8473 伏見区下鳥羽広長町17　ユニハイム伏見大手筋309 ☎602-7422	
赤瀧知里	京都市立堀川高校	〒610-1106 西京区大枝沓掛町14-26 ☎332-0680	〒607-8075 山科区音羽野田町7-5　進和山科ハイライフ1007 ☎592-0094	
足利善男	京都産業大学	〒603-8047 北区上賀茂本山 ☎701-2151	〒607-8345 山科区西野離宮町2-1 F-607 ☎501-7256	発育・生理
東　隆暢	龍谷大学	〒612-0021 伏見区深草塚本町67 ☎642-1111	〒520-0865 大津市南郷2-16-16 ☎0775-34-7896	生理
有田博之	福知山市立日新中学校	〒620-0867 福知山市前田35 ☎0773-27-3520	〒620-0035 福知山市内記5-70-11 ☎0773-24-0128	
有賀郁敏	立命館大学	〒603-8577 北区等持院北町56-1 ☎465-1111	〒616-8362 右京区嵯峨五島町41　嵯峨西和607 ☎862-4596	
池田章子	立命館大学大学院	〒603-8577 北区等持院北町56-1 ☎465-1111	〒615-8106 西京区川島滑樋町　グリーンパークⅡ316 ☎393-4771	スポーツ人類学
伊坂忠夫	立命館大学理工学部	〒525-0055 草津市野路町1916 ☎0775-66-1111	〒525-0052 草津市西矢倉3-3-34 ☎0775-63-9080	バイメカ
石川俊紀	京都産業大学	〒603-8555 北区上賀茂本山 ☎701-2151	〒603-8002 北区上賀茂神山7-10 ☎701-3029	発育・生理
石博清司	滋賀大学教育学部	〒520-0862 大津市平津2-5-1 ☎0775-37-7726	〒616-0014 西京区嵐山谷ケ辻子町3-12 ☎864-1446	
石博登志子	平安女学院短期大学	〒569-1092 高槻市南平台5-81-1 ☎0726-93-2311	〒616-0014 西京区嵐山谷ケ辻子町3-12 ☎864-1446	発育
石原昭彦	京都大学総合人間学部	〒606-8501 左京区吉田二本松町 ☎753-6881	〒602-0007 上京区新町通御霊前上ル下清蔵口町483　西陣宿舎242 ☎411-2199	生理・バイメカ
伊地智雄三	京都府立東宇治高校	〒611-0002 京都市小幡平尾4302 ☎0774-32-6390	〒610-0121 城陽市寺田林ノ口11-328 ☎0774-54-0725	心理
※井尻麻里子	京都体力医科学研究所	〒615-8231 西京区御陵溝浦24 ☎393-6664	〒629-3431 熊野郡久美浜町鹿野1128 ☎0722-83-0891	
一井久子	南海福祉専門学校	〒592-0005 高石市千代田6-12-53 ☎0722-62-1094	〒590-0138 堺市鴨谷台3-3-1-402 ☎0722-98-0605	
伊藤一生	東亜大学大学院総合学術研究所	〒751-0807 下関市一の宮学園町2-1 ☎0832-56-1112	〒601-1316 伏見区醍醐古道町21-5 ☎571-1184	生理・発育
伊藤克広	京都教育大学	〒612-0863 伏見区深草藤森町1 ☎644-8283	〒612-0089 伏見区深草佐野屋敷町11-4-310 ☎645-6708	
伊藤浩一	大塚製薬㈱	〒600-8413 下京区烏丸仏光寺下ル　第八長谷ビル6階 ☎343-5541	〒600-8388 下京区綾小路通大宮西入坊門町768田村マンション111号 ☎822-6552	発育
伊藤太郎	英和大学文学部	〒661-8530 尼崎市若王寺2-18-1 ☎06-6491-5000	〒554-0001 大阪市此花区高見1-4-54-1010 ☎06-6460-8754	生理・発育・バイメカ
伊藤輝雄	京都産業大学	〒603-8555 北区上賀茂本山 ☎701-2151	〒606-1123 左京区静市市原町1116-6 ☎741-3650	
伊藤　稔	天理大学体育学部	〒632-0071 天理市田井庄町1 ☎07436-2-3076	〒601-1316 伏見区醍醐古道町21-5 ☎571-1184	生理・バイメカ

氏　名	勤務先	所在地	自宅住所	所属分科会
稲岡純史	立命館大学非常勤講師	〒603-8577 北区等持院北区56-1 ☎465-1111	〒527-0100 愛知郡湖東町平柳1676 ☎0749-45-2987	バイメカ
井上恵子	滋賀医科大学非常勤講師	〒520-2192 大津市瀬田月輪町 ☎0775-48-2111	〒520-0016 大津市比叡平3-55-30	
井上辰樹	ノートルダム女子大学	〒606-0847 左京区下鴨南野々神町1 ☎781-1173	〒606-0081 左京区上高野畑町24-8 ハタテラス6 ☎722-0891	
井上フミ	京都女子高校	〒605-8501 東山区今熊野北日吉町17 ☎531-7367	〒600-8034 下京区河原町通松原上ル幸竹町381 ☎351-4266	発育
今井優	医仁会武田総合病院	〒601-1434 伏見区石田森南町28-1 ☎572-5139	〒611-0011 宇治市五ケ庄西川原32-8 ユニライフ宇治A-205 ☎0774-31-6089	バイメカ
今里正克	京都産業大学	〒603-8555 北区上賀茂本山36 ☎701-2151	〒603-8026 北区上賀茂中山町37-7 ☎791-4734	
井街悠	京都大学体育指導センター	〒606-8501 左京区吉田本街 ☎751-2111	〒606-8131 左京区一乗寺稲荷町21 ☎711-5438	生理・バイメカ
岩崎崇			〒520-0851 大津市唐橋町2-15 ☎0775-37-1141	原理歴史
岩野悦真	同志社大学	〒610-0394 京田辺市多々羅都谷1-3 ☎0774-65-7510	〒617-0822 長岡京市八条ケ岡1-1-1-102 ☎955-8203	生理
上田滋夢			〒606-8002 左京区山端大城田町20 ライオンズマンション修学院106	原理
植田佳子	同志社高校	〒606-8558 左京区岩倉大鷺町 ☎781-7121	〒604-0907 中京区姉小路富小路西入ル ☎221-1218	心理・指導
内田苑子	ノートルダム女子大学	〒606-0847 左京区下鴨南野々神町1 ☎781-1173	〒525-0037 草津市西大路町10-10-13-1010 ☎0775-61-7877	発育
卯野優	京都産業大学	〒603-8555 北区上賀茂本山 ☎701-2151	〒612-8074 伏見区指物町562☎611-0902	
梅田陽子	㈲トータルベーシック	〒550-0022 大阪市西区本田1丁目8-15 ☎06-6581-1402	〒550-0004 大阪市西区靭本町3丁目5-23 エクセル京町堀7B（塩崎方）	心理・生理
榎本かおり	オレゴン州立大学		〒611-0002 宇治市木幡正中58-2 ☎0774-32-4459	バイメカ
遠藤浩	京都教育大学	〒612-0863 伏見区深草藤森町1 ☎644-8291	〒613-0916 伏見区淀美豆町684 淀川リバーサイド1110号 ☎632-2833	
遠藤保子	立命館大学産業社会学部	〒603-8577 北区等持院北町56-1 ☎465-1111	〒520-2331 野洲郡野洲町小篠原1971-2-615 ☎0775-86-5432	原理歴史・指導・管理
大石宗雄	大阪ビジネスカレッヂ専門学校	〒530-0004 大阪市北区堂島浜1-1-76 ☎06-6341-4403	〒602-8243 上京区西堀川上長者町下ル奈良物町472-1 ライオンズマンション西陣南601号 ☎432-4007	
大木久知	池坊短期大学	〒600-8491 下京区室町通四条下ル ☎351-8581	〒607-8143 山科区東野南井ノ上町17-15 ☎581-8725	発育
大島秀武	㈱オムロンライフサイエンス研究所		〒615-8265 西京区山田御道路町26-201	
太田正勝	舞鶴工業高等専門学校	〒625-0016 舞鶴市白屋234 ☎0773-62-5600	〒625-0003 舞鶴市吉野870-3 ☎0773-63-9802	原理歴史
大西健	京都産業大学	〒603-8555 北区上賀茂本山 ☎701-2151	〒610-1113 西京区大枝南福西町2-6-10 ☎332-3470	
大秦真利子	キリスト教社会福祉専門学校	〒618-0001 大阪府三島郡島本町山崎10 ☎962-1115	〒616-8106 右京区太秦森ケ西町3-10 ☎862-3313	発育
大山肇	京都外国語大学	〒615-0073 右京区西院笠目町6 ☎864-8700	〒621-0815 亀岡市古世町中内坪74 ☎0771-23-4932	発育・原理歴史
岡尾恵市	立命館大学	〒603-8577 北区等持院北町56-1 ☎466-3138	〒606-8313 左京区吉田中大路町32 ☎761-7616	原理歴史・管理

氏名	勤務先	所在地	自宅住所	所属分科会
岡本　進	滋賀県立大学	〒522-0057 彦根市八坂町2500 ☎0749-28-8258	〒520-0106 大津市唐崎4-3-21 ☎0775-79-6065	
岡本直輝	立命館大学経営学部	〒603-8577 北区等持院北町56-1 ☎465-1111	〒610-0121 城陽市寺田深谷7 ☎0774-56-2335	生理・バイメカ
岡本信之	明治乳業㈱	〒104-0031 東京都中央区京橋2-3-6 ☎03-3281-9026		
奥田愛子			〒520-0037 大津市御陵町1-29 別所合同宿舎522 ☎0775-21-1922	心理
奥田援史	滋賀大学教育学部	〒520-0862 大津市平津2-5-1 ☎0775-37-7740	〒520-0037 大津市御陵町1-29-522 ☎0775-21-1922	心理
小倉美津子	仏教大学	〒603-8301 北区紫野北花ノ坊町96 ☎491-2141	〒604-8431 中京区西ノ京原町1-29-522 ☎0775-21-1922	管理・心理
小河繁彦	京都大学大学院	〒606-8501 左京区吉田二本松町 ☎753-6877	〒606-8311 左京区吉田神楽岡町172 ウィステリア神楽岡102 ☎752-9184	
小田修司	京都市立葵小学校	〒616-0852 左京区下鴨東梅ノ町8 ☎701-7151	〒610-1145 西京区大原野西竹ノ里町1-5-11 ☎332-6163	指導
小田伸午	京都大学総合人間学部	〒606-8501 左京区吉田二本松町 ☎753-6876	〒569-1022 高槻市日吉台四番町17 ☎0726-89-9383	生理・バイメカ
※ 小野桂市	奈良教育大学	〒630-8528 奈良市高畑町 ☎0742-27-9231	〒611-0027 宇治市羽拍子町56-24 ☎0774-44-7626	生理・指導・バイメカ
小野伸一郎	舞鶴工業高等専門学校	〒625-0016 舞鶴市白屋234	〒601-1434 伏見区石田森南町34 醍醐石田団地29-406 ☎573-9173	
小野裕子	同志社国際中・高校	〒610-0321 京田辺市多々羅60-1 ☎0774-65-8911	〒610-0302 京都府綴喜郡井出町多賀西北組30 エスポワール22-301 ☎0774-82-6036	社会・心理
小幡真一郎	京都教育大学教育学部附属高校	〒612-0037 京都市伏見区深草関屋敷町 ☎075-641-9195	〒573-1121 枚方市楠葉花園町5-1-810 ☎0720-51-5117	
小山　真	㈱ワコール人間科学研究所	〒601-8313 南区吉祥院中島町35 アクティブセンター内 ☎682-1025	〒601-8302 南区吉祥院西ノ庄渕ノ西町20-2 エスペランサ205 ☎314-5747	生理バイメカ
蔭山靖夫	京都産業大学	〒603-8555 北区上賀茂本山 ☎701-2151		
風井訟恭	仏教大学	〒603-8301 北区紫野北花ノ坊町96 ☎491-2141	〒563-0023 池田市井口堂町1-7-27 ☎0727-61-3901	バイメカ
金井淳二	立命館大学	〒603-8577 北区等持院北町56-1 ☎463-1131	〒612-8405 伏見区深草勧進橋町113 ☎642-3947	
※ 兼高明生	矢倉診療所	〒525-0054 草津市東矢倉2丁目 ☎0775-64-5689	〒525-0055 草津市野路町1919-14 ☎0775-63-8629	
金田啓稔	佛教大学	〒603-8301 北区紫野北花ノ坊町96 ☎491-2141	〒606-8412 左京区浄土寺下馬場町5 ☎075-752-2915	社会心理
上村　守	京都教育大学	〒612-0863 伏見区深草藤森町1 641-9281	〒520-0037 大津市御陵町1-30 別所合同宿舎921 ☎0775-25-5130	バイメカ・指導
川井　浩	京都大学医療技術短大部	〒606-8507 左京区聖護院川原町53 ☎751-3941	〒666-0016 川西市中央町7-9 ☎0727-58-2370	生理
河合美香	立命館大学	〒603-8577 北区等持院北町56-1 ☎463-1131	〒606-0833 左京区下鴨前萩町5-8-202	
河合留美子	医仁会武田総合病院	〒601-1434 伏見区石田森南町28-1 ☎572-6331	〒611-0002 宇治市木幡平尾20-28 ☎0774-32-4148	
川口晋一	立命館大学産業社会学部	〒603-8577 北区等持院北町56-1 ☎465-1111	〒616-8205 右京区宇多野御屋敷町1-5-403 ☎464-2756	
川末登代子	仏教大学	〒603-8301 北区紫野北花ノ坊町96 ☎491-2141	〒616-8374 右京区嵯峨天竜寺北造路町20-21 ☎881-3292	
川瀬　晃	高月小学校	〒529-0241 伊香郡高月町高月250 ☎0749-85-2002	〒526-0200 東浅井郡びわ町南浜698 ☎0749-72-2734	心理社会・指導

氏　名	勤務先	所在地	自宅住所	所属分科会
河内山　隆　紀	京都大学大学院人間・環境学研究科	〒606-8501 左京区吉田二本松町 ☎753-6889	〒606-8311 左京区吉田神楽岡町81 ヴィラ六基301号 ☎752-0285	
川　畑　愛　義	日本生活医学研究所	〒604-8156 中京区室町通錦小路上ル山伏山町558　山洋室町ビル606 ☎221-0331	〒605-1925 東山区今熊野日吉町48 ☎531-5318	発育
河　原　慶　子	大谷大学非常勤講師	〒603-8143 北区小山上総町 ☎432-3131	〒617-0817 長岡京市滝ノ町2-20 ☎954-5488	
川　辺　秀　樹	西宮市立鳴尾小学校	〒663-8184 西宮市鳴尾町5-4-6 ☎0798-47-0130	〒572-0016 寝屋川市国松町22-31 ☎0720-23-4093	
川　村　隆　史	京都府立洛西高校	〒610-1146 西京区大原野西境谷町1 ☎332-0555	〒606-0827 左京区下鴨西半木町10-2 701-5740	生理
川　本　末　夫			〒615-8101 西京区川島東代町80-4 ☎381-7381	管理
神　崎　清　一	京都ＹＭＣＡ	〒604-8083 中京区三条柳馬場 ☎231-4388	〒610-1146 西京区大原野西境谷町4-12-194 ☎332-6738	
神　原　啓　文	大阪赤十字病院心臓血管センター	〒543-0027 大阪市天王寺区筆ケ崎町5-53 ☎06-6771-5131	〒606-0002 左京区岩倉中大鷺町16-2 ☎721-1093	
門　田　浩　二	京都教育大学	〒612-0863 伏見区深草藤森町1 ☎644-8288	〒612-0029 伏見区深草西浦町7-2-106	
菊　池　はるひ	京都精華大学	〒606-8588 左京区岩倉木野町137 ☎702-5125	〒600-8432 下京区仏光寺通室町西入糸屋町217　シティポイント22-507 ☎341-5906	バイメカ
岸　本　吉　史	京都教育大学	〒612-0863 伏見区深草藤森町1 ☎641-9281	〒612-8104 伏見区西奉行町1-2 ☎611-6952	バイメカ
来　田　宣　幸	京都大学大学院人間・環境学研究科	〒605-8501 左京区吉田二本松町 ☎753-7865	〒606-8306 左京区吉田中阿達町50　第一洛東荘1号 ☎761-3304	生理・バイメカ
北　川　　隆	京都女子大学	〒605-8501 東山区今熊野北日吉町35 ☎531-7183	〒664-0858 伊丹市西台1-2-8 ☎0727-73-3284	
北　尾　岳　夫	京都精華大学非常勤講師	〒606-8588 左京区岩倉木野町137 ☎702-5200	〒606-8166 左京区一乗寺庵野町41-1 ☎075-712-5990	
北　村　映　子	ノートルダム女子大学	〒606-0847 左京区下鴨南野々神町1 ☎781-1173	〒606-0024 左京区岩倉花園町35 ☎711-2560	発育・生理
北　本　　享	立命館大学	〒606-8577 北区等持院北町56-1 ☎465-1111	〒603-8374 北区衣笠高橋町29 ☎461-2756	発育
衣　川　和　宏	西陣和楽園	〒602-8357 上京区下長者町七本松西入ル鳳瑞町247 ☎461-2060	〒602-8357 上京区下長者町七本松西入ル鳳瑞町247 ☎461-2060	発育
木　村　みさか	京都府立医科大学医療技術短大部	〒602-0857 上京区広小路通河原町西入ル ☎212-5439	〒615-8111 西京区川島松園町87 ☎392-3885	生理・発育
深　草　直　臣	立命館大学	〒603-8577 北区等持院北町56-1 ☎465-1111	〒621-0847 亀岡市南つつじケ岡桜台3-22-6 ☎0771-22-6724	
窪　田　通　雄	龍谷大学	〒612-8577 伏見区深草塚本町67 ☎642-1111	〒630-8105 奈良市佐保台3-902-63 ☎0742-71-1408	原理歴史
倉　敷　千　稔	神戸女子大学	〒654-8585 神戸市須磨区東須磨青山2-1 ☎078-731-4416	〒606-0807 左京区下鴨泉川町5 ☎781-4412	生理
小　島　広　政	京都産業大学	〒603-8555 北区上賀茂本山 ☎701-2151	〒614-8327 八幡市橋本栗ケ谷2-8 ☎981-3417	発育・心理社会
※ 古　城　正　裕	同志社国際中学・高等学校	〒610-0321 京田辺市多々羅都谷60-1 ☎0774-65-8911	〒573-0164 枚方市長尾谷町2-687	
小　西　達　郎	京都女子大学	〒605-8501 東山区今熊野北日吉町35 ☎531-7183	〒611-0002 宇治市木幡平尾28-340 ☎0774-32-2617	発育
小　西　博　喜	川崎医療福祉大学	〒701-0193 倉敷市松島577 ☎086-462-1111	〒603-8344 北区等持院南町68 ☎461-3904	発育
小　林　明　子			〒527-0019 八日市市松尾町3-191 ☎0748-23-7131	バイメカ

	氏名	勤務先	所在地	自宅住所	所属分科会
※	小林久幸	帝塚山短期大学	〒631-8585 奈良市学園南3-1-3 ☎0742-41-4730	〒631-0842 奈良市菅原町232-10 ☎0742-44-3471	
	小林光子	華頂短期大学	〒605-0062 東山区林下町3-456 ☎551-1188	〒617-0002 向日市寺戸町八ノ坪1-60 ☎931-3067	
※	小堀優子	京都精華大学非常勤講師	〒606-8588 左京区岩倉木野町137 ☎702-5125	〒606-8202 左京区田中大堰町109 丸美荘15 ☎702-1070	バイメカ
	小幡真一郎	京都教育大学附属高校	〒612-0037 伏見区深草関屋敷町 ☎641-9195	〒573-1121 枚方市楠葉花園町5-1-810 ☎0720-51-5117	方法
	近藤敏郎	京都保健会上京病院	〒602-8304 上京区千本上立売通上ル作庵町504 ☎432-1261	〒569-1037 高槻市東城山町11-20	
	西条正典	滋賀県立堅田高校	〒520-0242 大津市本堅田3-9-1 ☎0775-72-1206	〒520-0231 大津市真野普門町612-2 ☎0775-72-3226	原理歴史
	斉藤篤司	向陽高校	〒617-0006 向日市上植野町西太田 ☎922-4500	〒617-0853 長岡京市奥海印寺東山6-16 ☎956-3733	
	斉藤昌久	京都府立口丹波勤労者福祉会館	〒629-0134 船井郡八木町西田金井畠9 ☎0771-42-5484	〒629-0133 船井郡八木町観音寺山ノ下17 ☎0771-42-2710	バイメカ
※	坂　なつこ	立命館大学社会学研究科博士課程	〒603-8577 北区等持院北町56-1 ☎075-465-1111	〒602-8411 上京区寺ノ内通堀川西入東西町373 西川様方 ☎075-441-2224	
	桜間洋二	アラコム㈱大阪支社		〒573-1121 枚方市楠葉花園町2 楠葉合同宿舎1-104 ☎0720-56-7657	バイメカ
	迫　登美代	京都市立一橋小学校	〒605-0965 東山区本町通10丁目東入ル下ル池田町527 ☎561-3170	〒569-0063 高槻市南庄所町7-6 ☎0726-71-7832	
	佐々木　潔	京都教育大学附属高校	〒612-0037 伏見区深草関屋敷町 ☎641-9195	〒615-0801 右京区西京極豆田町5 パークテラス西京極601 ☎311-4989	
	佐竹敏之	光華女子短期大学	〒615-0882 右京区西京極葛野町38 ☎312-1783	〒616-8454 右京区嵯峨清滝深谷町5 ☎871-5217	発育
	佐藤瓊子	京都女子大学	〒605-8501 東山区今熊野北日吉町35 ☎531-7181	〒606-0007 左京区岩倉東五田町49 ☎711-6655	生理・発育
	佐藤尚武	滋賀大学教育学部	〒520-0862 大津市平津2-5-1 ☎0775-37-7757	〒520-0812 大津市木下町6-5 ☎0775-22-9382	生理
	佐東恒子	平安女学院短期大学	〒569-1092 高槻市南平台5-81-1 ☎0726-93-2311	〒606-8007 左京区山端壱町田町1-7 ハイツエンペラ修学院403 ☎722-7247	発育
	佐藤良暢	近畿予防医学研究所		〒606-0833 左京区下鴨前荻町8 ☎781-7688	生理
	佐藤善治	立命館大学	〒603-8577 北区等持院北町56-1 ☎463-1131	〒621-0824 亀岡市篠町見晴1-2-10 ☎07712-4-6348	
	真田民樹	明治鍼灸大学	〒629-0301 船井郡日吉町保野田 ☎0771-72-1181	〒622-0043 船井郡園部町小山西町野本19-1 ☎0771-62-0903	
	澤　淳一	滋賀県立体育館	〒520-0801 大津市におの浜4-2-12 ☎0775-24-0221	〒520-2331 野洲郡野洲町小篠原2172-5 ☎0775-87-1094	発育
	澤田和明	滋賀大学教育学部	〒520-0862 大津市平津2-5-1 ☎0775-37-7761	〒520-0863 大津市千町2-17-10 ☎0775-34-2234	指導
	塩見雅文	京都短期大学	〒620-0886 福知山市字堀3370 ☎0773-22-5852	〒620-0062 福知山市和久市町45-5 ☎0773-23-0166	発育
	芝田徳造	成安造形大学	〒520-0248 大津市仰木町 ☎0775-74-2111	〒607-8308 山科区西野山桜ノ馬場町113 ☎581-4895	
	柴田亨三	立命館大学（非常勤講師）	〒603-8577 北区等持院北町56-1 ☎463-1131	〒601-1123 左京区静市市原町1053-18 ☎741-2956	生理・発育
	清水啓司	奈良産業大学	〒636-8503 生駒郡三郷町立野北3-12-1 ☎0745-73-7800	〒520-0225 大津市清風町38-4 ☎0775-72-3734	バイメカ・発育
	下村雅昭	京都女子大学	〒605-8501 東山区今熊野北日吉町35 ☎531-7184	〒520-0248 大津市仰木の里東6-5-20 ☎0775-74-3275	生理・バイメカ

氏名	勤務先	所在地	自宅住所	所属分科会
新野　守			〒520-0223 大津市美空町1-21-302 ☎077-573-5107	歴史
新矢博美	京都女子大学	〒605-8501 東山区今熊野日吉町35		
末利　博			〒612-8017 伏見区桃山南大島町62-1 ☎611-7381	心理社会
菅原拓也	琵琶湖大橋病院	〒520-0232 大津市真野5-1-29 ☎0775-73-4321	〒569-1135 高槻市今城町26-19 ☎0726-83-1538	
杉浦　健	京都大学大学院	〒606-8501 左京区吉田本町 ☎753-3062	〒606-8061 左京区修学院宮ノ脇町18 鷲ノ森103 ☎711-3278	
杉本厚夫	京都教育大学	〒612-0863 伏見区深草藤森町1 ☎644-8283	〒611-0012 宇治市羽戸山3-1-80 ☎0774-33-5024	原理歴史
杉本憲一	京都府立城南高校	〒611-0031 宇治市広野町丸山10 ☎0774-41-6165	〒611-0025 宇治市神明石塚54-426 ☎0774-24-6235	バイメカ
※角　明	京都府立北桑田高校	〒601-0534 北桑田郡京北町大字下弓削 ☎0771-54-0022	〒615-0054 右京区西院月双町　パティオ篠222 ☎075-321-1943	
瀬戸　進	大谷大学文学部	〒603-8143 北区小山上総町22 ☎432-3131	〒607-8146 山科区東野舞台町14-14 ☎593-6008	発育・管理
※瀬良美代子	京都教育大学大学院	〒612-0863 伏見区深草藤森1 ☎075-644-8281	〒612-8357 伏見区帯屋町906-303 ☎075-622-8258	
千賀康利	京都産業大学	〒603-8555 北区上賀茂本山 ☎701-2151	〒615-8113 西京区川島梅園町11 ☎392-2039	生理
千家弘行	京都大学大学院人間・環境学研究科	〒606-8501 左京区吉田二本松町 ☎753-2874	〒602-8448 上京区今出川通大宮西入ル元北小路町155-902 ☎431-3202	生理
宋　榮桂	京大大学院人間環境学研究科	〒606-8501 左京区吉田近衛町 ☎753-2983	〒606-8413 左京区浄土寺下馬場町50-2 上伊マンション109号 ☎761-5580	生理・測定評価
高木克美	京都造形芸術大学	〒606-8271 左京区北白川瓜生山2-116 ☎791-9121	〒615-8082 西京区桂上豆田町6-6 ☎381-3246	生理
高安和典	京都教育大学附属高校	〒612-0037 伏見区深草関屋敷町 ☎641-9195	〒612-8006 伏見区桃山町大嶋38-395 ☎621-4462	バイメカ
高安マリ子	マリ子ダンスシアター	〒600-8492 下京区四条通烏丸西入ル大同四条ビルB1 ☎211-8392	〒520-2153 大津市一里山-5-20-6 ☎0775-43-2496	
田口貞善	京都大学人間・環境学研究科	〒606-8501 左京区吉田二本松町 ☎753-6877	〒573-1197 枚方市禁野本町2-12-142 ☎0720-48-6269	バイメカ・生理
田口佃洋	龍谷大学瀬田学舎	〒520-2194 大津市瀬田大江町横谷1-5 ☎0775-43-5111	〒612-8141 伏見区向島二の丸町134-2 ☎621-3592	
竹内京一	奈良産業大学	〒636-8503 生駒郡三郷町立野北3-12-1 ☎0745-73-7800	〒603-8164 北区紫野東御所田町27 ☎431-2659	心理社会・原理歴史
武田隆久	武田病院	〒600-8216 下京区塩小路通西洞院東入ル東塩小路町841-5 ☎361-1355	〒600-8232 下京区木津屋橋通油小路東入ル南町507 ☎371-2765	生理
竹田正樹	同志社大学文学部	〒610-0394 京都府綴喜郡田辺町多々羅都谷1-3 ☎0774-65-7533	〒611-0031 宇治市広野町宮谷75-1 ガーデンハイツ広野203 ☎0774-45-2641	生理
武部吉秀	甲賀総合科学専門学校	〒520-3403 甲賀郡甲賀町鳥井野1685 ☎0748-88-6177	〒520-0865 大津市南郷2-17-3 ☎0775-34-2922	生理
田阪登紀夫	同志社大学	〒610-0394 京田辺市多々羅都谷1-3 ☎0774-65-7510	〒606-0027 左京区岩倉忠在地町273-2 ☎701-9211	生理
田尻茂隆	宇治高校	〒611-0013 宇治市菟道谷下り31 ☎0774-22-4010	〒619-0200 相楽郡木津町宮ノ裏110-11 ☎07747-2-5814	指導
田附俊一	同志社大学	〒610-0394 京田辺市多々羅都谷1-3 ☎0774-65-7510	〒611-0011 宇治市五ケ庄平野5-2　宇治黄檗パークホームズ721 ☎0774-33-7922	バイメカ

氏名	勤務先	所在地	自宅住所	所属分科会
田中邦彦	京都教育大学大学院	〒612-0863 伏見区深草藏森町1 ☎641-9281	〒612-0038 伏見区深草仙石屋敷町59 昭和荘 ☎643-9653	
田中繁男	京都薬科大学	〒607-8414 山科区御陵中間町5 ☎581-3161	〒606-8401 左京区浄土寺小山町1-30 ☎771-7771	
田中信雄	京都産業大学	〒603-8555 北区上賀茂本山 ☎701-2151	〒525-0027 草津市野村町8-10-17 ☎0775-64-1027	生理
※ 谷口博志	上鳥羽小学校	〒601-8137 南区上鳥羽城ケ前町16 ☎691-0393	〒612-0829 伏見区深草谷口70-46 ☎643-6250	
棚山研	立命館大学非常勤	〒603-8577 北区等持院北町56-1 ☎465-1111	〒615-0066 右京区西院四条畑町6 四条マンション203 ☎322-1663	
田中賢吉	京都教育大学大学院	〒612-0863 伏見区深草藤森町1 ☎641-9281	〒612-0829 伏見区深草谷口町6 久保学生アパート101号室 ☎645-5807	
種村紀代子	京都女子大学	〒605-8501 東山区今熊野北日吉町35 ☎531-7183	〒615-8086 西京区桂乾町53-117 ☎381-5420	発育
※ 種村裕侑	京都府立南丹高校	〒612-0064 伏見区桃山毛利長門西町 ☎612-3266	〒610-0121 城陽市寺田樋尻18 ☎0774-52-4074	
田淵和彦	同志社大学	〒610-0394 京田辺市多々良都谷1-3 ☎0774-65-7510	〒606-0035 左京区上高野三宅町16-7 ☎721-5945	管理
辻彰彦	京都学園大学	〒621-8555 亀岡市曽我部町南条 ☎0771-22-2001	〒606-0802 左京区下鴨宮崎町41-3 ☎771-5505	
辻浅夫	京都外国語大学	〒615-0073 右京区西院笠目町6 ☎311-5181	〒615-8114 西京区川島桜園町13-1 ☎392-0875	原理歴史
辻道夫	華頂短期大学	〒605-0062 東山区林下町3-456 ☎551-1188	〒520-0245 大津市仰木町6100 レークピア大津仰木の里A67-20 ☎0775-72-3553	
津田房枝	京都府立南丹高校		〒610-1132 西京区大原野灰方町2-7 ☎332-2156	原理歴史
網村昭彦	光華女子短期大学	〒615-0882 右京区西京極葛野町38 ☎312-1783	〒610-1145 西京区大原野西竹の里町2-3-405 ☎331-4271	発育
寺田光世	京都教育大学	〒612-0863 伏見区深草藤森町1 ☎644-8288	〒611-0028 宇治市南陵町1-1-134 ☎0774-22-6726	
藤木序衣	龍谷大学	〒520-2194 滋賀県大津市瀬田大江町横谷1-5 ☎0775-43-5111	〒629-0134 船井郡八木町西田河原篠1-1 ☎0771-42-2958	
藤島みち	夙川学院短期大学	〒662-8555 西宮市こしき岩町6-58 ☎0798-73-3755	〒561-0833 豊中市庄内幸町5-12-6 ☎06-6332-1984	
古谷学	大阪リゾート＆スポーツ専門学校	〒532-0011 大阪市淀川区西中島3-6-2 ☎06-6886-7897 FAX 06-6886-9305	〒612-8369 京都市伏見区村上町376-502 ☎075-603-1655 FAX 075-603-1655	
徳田眞三	龍谷大学	〒612-8577 伏見区深草塚本町67 ☎642-1111	〒607-8252 山科区小野河原町6-1 第3ロイヤルハイツ和田405 ☎573-5102	
等々力賢治	龍谷大学	〒612-8577 伏見区深草塚本町67 ☎642-1111	〒610-0111 城陽市富野北角1-51 0774-56-6987	
富居富	同志社大学	〒610-0394 京田辺市多々羅都谷1-3 ☎0774-65-7510	〒611-0011 宇治市五ケ庄西浦32-7 ☎0774-33-7274	生理・バイメカ
豊田一成	滋賀大学教育学部	〒520-0862 大津市平津2-5-1 ☎0775-37-7785	〒524-0201 野洲郡中主町吉川1430 ☎0775-89-3912	
中比呂志	京都教育大学	〒612-0863 伏見区深草藤森町1 ☎644-8280	〒573-1193 枚方市御殿山南町4 枚方合同宿舎3143 ☎0720-98-4985	発育
中井誠一	京都女子大学	〒605-8501 東山区今熊野日吉町35 ☎531-7183	〒563-0122 豊能郡能勢町上田尻495 ☎0727-37-1308	生理
中川陽世	大阪ＹＭＣＡ社会体育専門学校	〒569-0095 高槻市八丁西町5-37 ☎0726-82-1322	〒573-0084 枚方市香里ケ丘8-13-8 ☎0720-53-4825	発育
中桐伸吾	大谷大学	〒603-8143 北区小山上総町5-37 ☎0726-82-1322	〒611-0031 宇治市広野町尖山2-110 ☎0774-43-2124	原理歴史

氏名	勤務先	所在地	自宅住所	所属分科会
中嶋大輔	京都橘女子大学非常勤講師	〒607-8175 山科区大宅山田町34 ☎571-1111	〒621-0811 亀岡市北古世町1-4-1 メゾンコラール2-C ☎0771-25-9890	
中島登代子	京都外国語大学	〒615-0073 右京区西院笠目町6 ☎861-1834	〒630-0201 生駒市小明町367-7 ☎07437-4-6006	
長沢邦子			〒573-1134 枚方市養父丘2-3-7 ☎0720-56-2265	
長瀬整司	同志社大学非常勤講師	〒610-0394 京田辺市多々羅都谷1-3 ☎0774-65-7511	〒602-0838 上京区今出川通烏丸東入ル 相国寺門前町 ☎256-4306	
長野正	大津市立唐崎小学校	〒520-0002 大津市際川4-7-1 ☎0775-25-2375	〒520-2153 大津市一里山3-38-28 ☎0775-45-8678	
中村栄太郎	京都大学総合人間学部	〒606-8501 左京区吉田二本松町 ☎753-6886	〒610-0361 京田辺市河原平田13-29 ☎0774-62-1013	発育・生理
中村樗	花園大学	〒604-8456 中京区西ノ京壺ノ内町8-1 ☎811-5181	〒616-8061 右京区花園春日町4 シャルマンコーポ円町703 ☎812-5368	
中村紀代	滋賀女子短期大学	〒520-0803 大津市竜ケ丘24-4 ☎0775-24-3605	〒520-0867 大津市大平1-21-3 ☎0775-33-3518	発育
※ 中村美也	立命館大学非常勤講師	〒603-8577 北区等持院北町56-1 ☎465-8165	〒617-0854 長岡京市こがねケ丘9-32 ☎954-4620	
中村秀夫	帝塚山短期大学部	〒631-8585 奈良市学園南町3 0742-43-4433	〒615-8214 西京区上桂東居町45 ☎381-2759	
中森一郎	大谷大学短期大学部	〒603-8143 北区小山上総町 ☎411-8068	〒607-8483 山科区北花山市田町94 ☎502-5969	原理歴史
中森洋子	嵯峨美術短期大学	〒615-8362 右京区嵯峨五島町1 ☎864-7858	〒606-8107 左京区高野東開町1-23 東大路高野第3住宅27-406 ☎781-2974	原理歴史
※ 西村孝七	鴨沂高校	〒602-0867 上京区寺町荒神口下ル ☎231-1512	〒606-0081 左京区上高野畑町39-2 ☎701-1955	発育・原理歴史
野崎康明	同志社女子大学	〒602-0893 上京区今出川通寺町西入ル ☎251-4255	〒610-1141 西京区大枝西新林5-9-5 ☎331-1611	発育
野原隆司	京都大学医学部	〒606-8507 左京区聖護院川原町54 ☎951-3191	〒603-8237 北区紫野上若草町15 ☎492-3730	
野原弘嗣	都教育大学	〒612-0863 伏見区深草藤森町1 ☎644-8281	〒520-0016 大津市比叡平2-44-7 ☎0775-29-2611	バイメカ・管理・生理
野村照夫	京都工芸繊維大学繊維学部	〒606-8585 左京区松ケ崎御所街道町 ☎724-7741	〒612-0031 伏見区深草池ノ内街 藤森合同宿舎115 ☎645-2686	バイメカ
橋口雅美	京都WMCA国際福祉専門学校	〒602-0902 上京区烏丸今出川下ル ☎432-3191	〒639-1024 大和郡山市南井町12-10 ☎07435-7-1782	
橋本禎万	京都学園大学	〒621-8555 亀岡市曽我部町南条大谷 ☎0771-22-2001		発育
長谷川豪志	京都産業大学	〒603-8555 北区上賀茂本山36 ☎701-2151	〒600-8894 下京区西七条市部町128 ☎313-4765	生理
長谷川裕	龍谷大学経営学部	〒612-8577 伏見区深草塚本町67 ☎642-1111	〒604 中京区麸屋町通丸太町下ル ☎213-3990	バイメカ
畑佐泰子	成安造形短期大学	〒617-0844 長岡京市調子1 ☎953-1111	〒611-0023 宇治市折居台1-4-197 ☎0774-24-2050	発育
蜂須賀弘久	神戸女子短期大学	〒650-0046 神戸市中央区港島中町4-7-2 ☎078-303-4711	〒611-0027 宇治市羽拍子町56-67 ☎0774-43-8466	管理
花田登			〒601-1311 伏見区醍醐大高町7-13 ☎571-2645	
濱口幸子	京都教育大学	〒612-0864 伏見区深草藤森1 ☎644-8100	〒631-0064 奈良市手塚山南3-5-5 ☎0742-47-8259	
浜口義信	同志社女子大学	〒610-0332 京田辺市興戸南鉾立 ☎0774-65-8581	〒674-0061 明石市大久保町森田155-4 ☎078-934-2683	原理歴史

氏　名	勤務先	所在地	自宅住所	所属分科会
浜崎順子	京都教育大学附属桃山小学校	〒612-0032 伏見区桃山筒井伊賀東町 ☎611-0138	〒520-0112 大津市日吉台3-16-4 ☎0775-79-4934	
浜崎　博	京都薬科大学	〒607-8414 山科区御陵中内町5 ☎595-4675 FAX 075-595-4765	〒520-0112 大津市日吉台3-16-4 ☎0775-79-4934	指導
濱田健次郎	京都薬科大学	〒607-8414 山科区御陵中内町5 ☎581-3161	〒611-0025 宇治市神明宮東20 ☎0774-22-0773	
早川清孝	京都市立芸術大学	〒610-1197 西京区大枝沓掛町13-6 ☎332-0701	〒663-8154 西宮市浜甲子園2-6-7 ☎0798-46-7421	発育
林　栄子	京都外国語大学	〒615-0073 右京区西院笠目町6 ☎322-6012	〒615-8072 西京区桂木ノ下町16-52 ☎381-8639	
林　昌一郎	同志社国際中高等学校	〒610-0321 京田辺市多々羅 ☎0774-65-8911	〒610-0353 京田辺市松井ケ丘1-13-2 ☎0774-63-6280	生理
林　正	滋賀大学教育学部	〒520-0862 大津市平津2-5-1 ☎0775-37-7795	〒607-8242 山科区勧修寺柴山町8-29 ☎581-5605	発育
林　英彰	京都教育大学	〒612-0863 伏見区深草藤森町1 ☎644-8287	〒573-1197 枚方市禁野本町2-11 枚方合同宿舎1422 ☎0720-98-6795	原理歴史
林　ひとみ	京都大学総合人間学部非常勤講師	〒606-8501 左京区吉田二本松町 ☎753-6875	〒602-8368 上京区御前通西裏上ノ下立売上ル北町574 ☎461-4220	発育
原田明正	平安女学院短期大学	〒569-1092 高槻市南平台5-81-1 ☎0726-93-2311	〒601-1332 伏見区醍醐下端山町16-26 ☎571-4419	管理
樋上弘之	滋賀女子高校	〒520-0052 大津市朝日が丘1-18-1 ☎0775-22-3465	〒524-0215 守山市幸津川町1197 ☎0775-85-0759	
火箱保之	京都産業大学	〒603-8555 北区上賀茂本山 ☎701-2151	〒601-1123 左京区静市市原町78-9 ☎741-2738	
平井　肇	滋賀大学教育学部	〒520-0862 大津市平津2-5-1 ☎0775-37-7801	〒520-0037 大津市御陵町1-28-533 ☎0775-23-5639	
平賀正治	松下産業衛生科学センター	〒571-0045 門真市殿島町7-6 ☎06-6906-1631	〒525-0055 草津市野路町1915-10 ☎0775-63-6627	
平野登志子	華頂短期大学	〒605-0062 東山区林下町3-456 ☎551-1188	〒610-0121 城陽市寺田宮ノ平3-138 ☎0774-53-5401	発育
平野嘉彦	京都外国語大学	〒615-0073 右京区西院笠目町6 ☎861-1834	〒621-0847 亀岡市南つつじケ丘桜台1-20-19 ☎07712-5-3674	
広中主司	京都造形芸術大学	〒606-8271 左京区北白川瓜生山2-116 ☎712-1669	〒614-8323 八幡市橋本興正10-7 ☎983-7984	バイメカ
廣藤千代子	大阪学院短期大学	〒564-8511 吹田市岸辺南2-37-1 ☎06-6381-8434	〒615-8131 西京区桂原五反田5-36 ☎392-8285	発育
廣部　厳			〒526-0014 長浜市口分田町851 ☎0749-62-6601	バイメカ
福川　敦	立命館大学	〒603-8577 北区等持院北町56-1 ☎465-1111	〒616-8154 右京区太秦皆生寺町18-1 セレクトマンション1F ☎864-6159	
福田　潤	福田小児科医院	〒606-8336 左京区岡崎北御所町25 ☎771-4362	〒606-8336 左京区岡崎北御所町25 ☎771-4362	発育
福本嶺生	舞鶴工業高等専門学校	〒625-0016 舞鶴市白屋234 ☎0773-62-5600	〒625-0052 舞鶴市行永1767-3 ☎0773-62-3892	心理社会
藤井博行	(財)京都府交通・労働等災害救済事業団	〒602-8303 上京区千本上立売東入上ル姥ケ寺の前町902 ☎441-0961	〒573-0007 枚方市堂山1-25-23 ☎0720-47-7434	
藤木序衣	龍谷大学	〒520-2194 大津市瀬田大江町横谷1-5 ☎0775-43-5111	〒629-0134 京都府船井郡八木町西田河原篠1-1	
藤沢義彦	同志社大学	〒610-0394 京田辺市多々羅都谷1-3 ☎0774-65-7510	〒602 上京区中立売室町西入ル室町スカイハイツ406 ☎415-2189	
藤田　登			〒573-1102 枚方市北楠葉町33-1 ☎0720-51-3790	生理・心理社会

氏　名	勤務先	所在地	自宅住所	所属分科会
古市久子	大阪教育大学	〒582-8582 柏原市旭ケ丘4-698-1 ☎0729-76-3211	〒614-8372 八幡市男山笹谷7-308-507 ☎982-0694	発育・指導
古川勝己	同志社大学	〒610-0394 京田辺市多々羅都谷1-3 ☎0774-65-7510	〒616-8102 右京区太秦森ケ東町38-40 ☎861-1088	バイメカ・生理
星名倫	同志社大学	〒610-0394 京田辺市多々羅都谷1-3 ☎0774-65-7510	〒610-0313 京田辺市三山木天神山11-36 ☎0774-62-9052	バイメカ・生理
星野繁一	龍谷大学	〒612-8577 伏見区深草塚本町67 ☎642-1111	〒601-8353 南区吉祥院這登中町47-2 ☎672-9345	指導
星野光信	京都産業大学	〒603-8555 北区上賀茂本山 ☎701-2151	〒606-8107 左京区高野東開町1-23　東大路高野第3住宅40号棟303 ☎701-9043	
穂積豊	京都府立朱雀高校	〒604-8384 中京区西ノ京式部町1 ☎841-0127	〒616-8262 右京区梅ケ畑向ノ地町36 ☎882-4355	
前山直	藍野学院短期大学	〒567-0012 茨木市東太田4-5-4 ☎0726-27-1711	〒527-0102 愛知郡湖東町平柳949-1	管理
牧田茂	医仁会武田総合病院リハビリセンター	〒601-1434 伏見区石田森南町28-1 ☎572-5139	〒520-0232 大津市真野2-28-1-807 ☎0775-73-9154	
増田正	京都府山城総合運動公園	〒611-0031 宇治市広野八軒屋谷1 ☎0774-21-0379	〒601-8212 南区久世上久世町542　パークテラス桂川604☎934-4803	発育
増田洋	嵯峨美術短期大学	〒616-8362 右京区嵯峨五島町1 ☎864-7858	〒606-8002 左京区山端大城田町20　ライオンズマンション修学院507号	発育
増原喜代			〒578-0961 東大阪市南鴻池町2-4-16 ☎06-6745-6674	
間瀬知紀	京都文教短期大学	〒611-0041 宇治市槇島町千足80 ☎0774-25-2444	〒605-0952 東山区今熊野宝蔵町58　ハイツ魚満306 ☎075-551-2399	運動生理・体育方法
※ 松浦範子	神戸女子大学	〒654-8585 神戸市須磨区東須磨青山2-1 ☎078-731-4416	〒594-0013 和泉市鶴山台4-8-14 ☎0725-43-6258	発育
松原周信	京都府立大学	〒606-8522 左京区下鴨半木町 ☎703-5417	〒564-0022 吹田市末広町10-8 ☎06-6382-2784	発育・バイメカ原理歴史
松村道一	京都大学総合人間学部	〒606-8501 左京区吉田二本松町 ☎753-6889	〒606-0078 左京区上高野東田町15-54 ☎722-0463	
丸山宣武	聖母女学院短期大学	〒612-0898 伏見区深草田谷町 ☎643-6781	〒575-0046 草津市追分町784-25 ☎0775-65-9838	バイメカ・発育
万井正人	京都造形芸術大学	〒606-8271 左京区北白川瓜生山2-116 ☎791-9121	〒606-8164 左京区一乗寺出口町1 ☎781-8309	生理・発育
三浦正行	立命館大学文学部	〒603-8577 北区等持院北町56-1 ☎465-1111	〒611-0002 宇治市木幡南山52-45 ☎0774-33-4802	
三浦幹夫	滋賀大学教育学部	〒520-0862 大津市平津2-5-1 ☎0775-37-7811	〒520-0037 大津市御陵町1-27　別所合同宿舎535 ☎0775-24-3425	
三笠友紀恵	夙川学院短期大学	〒662-8555 西宮市こしき岩町6-58 ☎0798-73-3755	〒604-8422 中京区西ノ京東月光町35 ☎811-1657	
三上昭二	山城高校	〒603-8355 北区大将軍坂田町29 ☎463-8261	〒617-0002 向日市寺戸町西ノ段19 ☎932-8256	発育
三神憲一	滋賀大学経済学部	〒522-0862 彦根市馬場1-1-1 ☎0749-22-5600	〒522-0054 彦根市西今野880-13 ☎0749-23-6782	方法
宮本孝	滋賀大学経済学部	〒522-0862 彦根市馬場1-1-1 ☎0749-22-5600	〒522-0027 彦根市東沼波町197-4 ☎0749-23-4614	生理・方法
水島克巳	京都造形芸術大学	〒606-8271 左京区北白川瓜生山2-116 ☎791-9121	〒611-0002 宇治市木幡南山74-7 ☎0774-32-5053	
水島美恵子	橙影学院	〒607-8025 山科区四宮柳山町29 ☎581-3136	〒611-0002 宇治市木幡南山74-7 ☎0774-32-5053	
水田勝博			〒607-8012 山科区安朱桟敷町18-1 ☎592-3626	生理

氏名	勤務先	所在地	自宅住所	所属分科会
見正 富美子	光華女子短期大学	〒615-0882 右京区西京極葛野町38 ☎312-1783	〒615-0072 右京区山ノ内池尻町6 京都四条グランドハイツ905 ☎321-0583	発育・生理
三宅 孝正	洛星高校	〒603-8342 北区小松原南町33 ☎463-3281	〒606-8182 左京区一乗寺赤ノ宮町19 シャトー高野201 ☎712-5616	
宮嶋 恒二	京都学園大学	〒621-8555 亀岡市曽我部南条大谷1 ☎0771-22-2001	〒603-8006 北区上賀茂北ノ原町28 奥村荘 ☎724-3944	
※ 宮村 茂紀	神戸女子大学	〒654-8585 神戸市須磨区東須磨青山2-1 ☎078-731-4416	〒535-0021 大阪市旭区清水2-2-25 ☎06-6955-0673	
村上 博巳	京都産業大学	〒603-8047 北区上賀茂本山 ☎701-2151	〒606-0025 左京区岩倉中町521 ☎722-2721	生理・バイメカ
※ 村川 健一	同志社女子大学	〒610-0332 京田辺市興戸南鉾立97-1 ☎0774-65-8581	〒573-0065 枚方市出口6-1-1-525号 ☎0720-31-5746	
村田 健三郎	龍谷大学	〒612-8577 伏見区深草塚本町67 ☎642-1111	〒520-2276 大津市里7-19-6 ☎0775-46-6784	
村山 勤治	滋賀大学教育学部	〒520-0862 大津市平津2-5-1 ☎0775-37-7817	〒520-0037 大津市御陵町1-37-1111 ☎0775-22-9313	原理歴史
本部 正樹	南京都高校	〒619-0245 相楽郡精華町下狛中垣内 ☎0774-93-0518	〒612-8415 伏見区竹田中島町1-2-305 ☎643-0905	
百田 丈二	立命館大学（非常勤講師）	〒603-8577 北区等持院北町56-1 ☎463-1131	〒615-0813 右京区西京極佃田町20 ☎321-5566	原理歴史・バイメカ
森 由利子	滋賀大学教育学部附属養護学校	〒520-0002 大津市際川3-9-1 ☎0775-22-6569	〒520-0500 滋賀郡志賀町比良53 ☎0775-96-1417	発育
森井 秀樹	京都文教短期大学	〒611-0041 宇治市槇島町千足80 ☎0774-21-4101	〒611-0021 宇治市宇治折居台4-1-13 ☎0774-24-8243	発育・生理
森田 正英	京都女子高校	〒605-8501 東山区今熊野北日吉町17 ☎531-7358	〒616-8306 右京区嵯峨広沢西裏町34-7 グリーンビラ広沢B303 ☎864-4704	
森谷 敏夫	京都大学人間・環境学研究科	〒606-8501 左京区吉田二本松町 ☎753-6888	〒612-8034 伏見区桃山町泰長老東合同宿舎834 ☎611-3196	バイメカ・生理
森津 陽太郎			〒520-2322 野洲郡野洲町南桜1857-55 ☎0775-86-0586	
八木 保			〒606-0054 左京区上高野三反田町2-14 ☎721-7216	発育・生理
安田 祐治			〒616-8191 右京区太秦中山町2-2 ☎462-7508	指導・発育・管理
藪根 敏和	京都教育大学	〒612-0863 伏見区深草藤森町1 ☎644-8282	〒573-1197 枚方市禁野本町2-11 枚方合同宿舎1422 ☎0720-49-8576	
山岡 憲二	京都文教短期大学	〒611-0041 宇治市槇島町千足80 ☎0774-21-4101	〒615-8177 西京区樫原六反田3-8 ☎864-2284	発育
山形 修	大阪成蹊女子短期大学	〒533-0007 大阪市東淀川区相川3-10-62 ☎06-6340-1515	〒569-0831 茨木市鮎川3-18-7 ☎34-6733	原理歴史
山形 敏明	同志社高校	〒606-8558 左京区岩倉大鷺町 ☎781-7121	〒606-8032 左京区修学院北沮沢町20-1 ☎722-7138	
山口 孝治	京都教育大学教育学部附属京都小学校	〒603-8164 北区紫野東御所田町37 ☎441-4166	〒520-0246 大津市仰木の里6-8-3 ☎595-0438	指導
山崎 先也	京都大学大学院	〒606-8501 左京区吉田二本松町	〒606-0916 左京区松ケ崎三反長町11-1 ☎721-2798	生理・バイメカ
山下 哲	京都学園大学	〒621-8555 亀岡市曽我部町南条大谷 ☎0771-22-2001	〒621-0831 亀岡市篠町森山先18-11 ☎0771-24-2448	
山下 秋二	京都教育大学	〒612-0863 伏見区深草藤森町1 ☎644-8285	〒573-1197 枚方市禁野本町2-12-341 ☎0720-40-8509	
山下 高行	立命館大学	〒603-8577 北区等持院北町56-1 ☎463-1131	〒616-8093 右京区御室堅町25-2 デラシオン御室302 ☎464-7632	原理歴史

氏名	勤務先	所在地	自宅住所	所属分科会
山下謙智	京都工芸繊維大学	〒606-8585 左京区松ケ崎御所海道町 ☎724-7734	〒572-0826 寝屋川市南水苑町11-1 ☎0720-24-0261	バイメカ
※山田敏男			〒525-0055 草津市野路町1903-69 ☎0775-64-1395	
山田知子	大谷大学	〒603-8143 北区小山上総町22 ☎432-3131	〒606-0814 左京区下鴨芝本町34-2 ☎781-7455	原理歴史・心理社会
山中博史	滋賀女子短期大学	〒520-0803 大津市竜ケ丘24-4 ☎0775-24-3605	〒611-0002 宇治市木幡御蔵山39-1037 ☎0774-33-3480	管理
山村康夫	城南高校	〒611-0031 宇治市広野町丸山10 ☎0774-41-6165	〒612-8086 伏見区京町北7-16 ☎611-0775	バイメカ
山本明美	大阪体育大学	〒590-0496 大阪府泉南郡熊取町野田1558-1 ☎0724-53-7000 FAX 0724-53-7028	〒607-8334 京都市山科区川田欠ノ上11-45 ☎075-593-8521	
山本剛史	滋賀女子短期大学	〒520-0803 大津市滝ケ丘24-4 ☎0775-24-3605	〒607-8147 山科区東野森野町23-4-507 ☎581-3454	
山本武司	華頂短期大学	〒605-0062 東山区林下町3-456 ☎551-1188	〒606-0027 左京区岩倉忠在地町85 ☎791-5964	発育
横井利信	㈱大塚製薬大津出張所	〒520-2152 大津市月輪2-19-5 大塚製薬㈱大津出張所	〒607-8065 山科区音羽山等地29-5 大塚製薬寮 ☎591-6457	
※横山一郎	京都教育大学	〒612-0863 伏見区深草藤森町1 ☎641-9281	〒611-0012 宇治市羽戸山2-1-84 ☎0774-33-0886	
横山勝彦	同志社大学	〒610-0394 京田辺市多々羅都谷1-3 ☎0774-65-7510		原理歴史
吉井伊久雄	野洲町立篠原小学校	〒520-2313 滋賀県野洲郡野洲町大篠原1414 ☎0775-87-0179	〒523-0817 近江八幡市浅小井町160 ☎0748-33-2035	心理発育
吉武康栄	京都大学大学院人間・環境学研究科	〒606-8501 左京区吉田二本松町 ☎753-2878	〒606-8274 左京区北白川大堂町47-1-105 ☎722-7327	生理
芳田哲也	京都工芸繊維大学工芸学部	〒606-8585 左京区松ケ崎御所街道町 ☎724-7296	〒606-8165 左京区一乗寺野田町2-2 ハイツ白川413 ☎701-6708	生理
※吉中康子	京都文化短期大学	〒621-8585 亀岡市曽我部町南条 ☎0771-22-2001	〒531-0073 大阪市北区本庄西3-7-10 ☎06-6372-1694	生理
米田祐子	同志社女子大学	〒610-0332 京田辺市興戸南鉾立97 ☎0774-65-8581	〒604-0962 中京区御幸町通二条上ル達磨町605 ネスト御所南3C ☎252-2325	生理・バイメカ
寄本明	滋賀県立大学	〒522-0057 彦根市八坂町2500 ☎0749-28-8259	〒524-0032 守山市岡町1-34 ☎0775-83-3095	生理
李西華	京都大学大学院人間・環境学研究科	〒606-8501 左京区吉田二本松町 ☎753-2874	〒606-8312 左京区吉田上大路町19 小谷様方 ☎752-5316	生理
※我妻玲	東京大学生命環境科学系大学院	〒153-0041 東京都目黒区駒場3-8-1 ☎03-5454-6864	〒153-0041 東京都目黒区駒場1-26-1 メゾンドアオキ301号 ☎03-3485-4674	生理
渡辺一正	大阪府立藤井寺工業学校	〒583-0021 藤井寺市御舟町10-1 ☎0729-55-0281	〒583-0012 藤井寺市道明寺4-6-8 ☎0729-52-0574	生理
渡辺憲一	龍谷大学	〒612-8577 伏見区深草塚本町67 ☎642-1111	〒520-0016 大津市比叡平2-45-13 ☎0775-29-2392	発育
渡辺隆	洛南高校	〒601-8478 南区壬生通八条下ル東寺町545 ☎681-6511	〒601-8475 南区八条内田町91-8 ☎671-7786	
渡部博子	京都教育大学大学院	〒612-0863 伏見区深草藤森町1 ☎641-9211	〒611-0021 宇治市宇治東内25-6	
和田尚	京都教育大学	〒612-0863 伏見区深草藤森町1 ☎644-8284	〒583-0026 藤井寺市春日丘3-3-13 ☎0729-53-0578	心理社会

移動による変更がありましたら、下記の所までお知らせ下さい。

〒606-8501京都市左京区吉田二本松町　京都大学 総合人間学部　小田伸午

電話075-753-6876　FAX 075-753-6734　E-mail: oda@life.h.Kyoto-u.ac.jp

編 集 委 員

岡 尾 惠 市　　小 田 伸 午　　藤 田　　登（委員長）

森 谷 敏 夫　　山 下 謙 智　　＜五十音順＞

Editer-in-Chief

Noboru FUJITA, Doshisha University (Professor Emeritus)

Kyotanabe, Kyoto 610-0394, Japan

Editorial Board

Keiichi OKAO, Ritsumeikan University

Shingo ODA, Kyoto University

Toshio MORITANI, Kyoto University

Noriyoshi YAMASHITA, Kyoto Institute of Technology

京都体育学研究　第14巻

平成11年1月20日印刷

平成11年2月1日発行

編集発行者　田 口 貞 善

印 刷 者　株式会社 あおぞら印刷

京都市中京区間之町通二条下ル三軒目西側

発 行 所　**京都体育学会**

〒606-8501　京都市左京区吉田二本松町

京都大学総合人間学部　中村研究室気付

執　筆　要　項

1．論文の長さは，文献・図表・abstractを含め８ページ（400字詰原稿用紙で30枚）までとする。但し超過した場合その費用は執筆者負担とする。

2．本誌論文の原稿執筆にあたっては，下記の事項を厳守されたい。

(1)　原稿は，市販の横書原稿用紙（Ｂ５判400字詰）に清書し或いはワードプロセッサ（Ａ４判40字×20行，15枚）により作成し提出する。

原稿は，**１枚目**：題目・英文標題，**２枚目**：著者名とそのローマ字名，著者の所属名とその正式英語名及び所在地（英文字），所属の異なる２人以上の場合著者名の右肩に＊，＊＊，・・・印を付して，脚注に＊，＊＊，・・・印ごとに所属名とその正式英語名及び所在地（英文字），**３枚目**：英文要約（タイプ用紙ダブルスペース250字以内），**４枚目**：和文要約（編集用；英文要約と同一内容），**５枚目**以降本文，注記，参考文献，図・表の順に書く。

(1)　外国人名・地名等の固有名詞には，原則として原語を用いること。固有名詞以外はなるべく訳語を用い，必要な場合は初出のさいだけ原語を付すること。

(3)　数字は算用数字を用いること。

(4)　参考文献の引用は「京都体育学研究」執筆要項補足による。（京都体育学研究第７，８巻参照）

(5)　注記は，補足的に説明するときのみに用い，本文中のその箇所の右肩上に註１）註２）のように書き本文の末尾と文献表の間に一括して番号順に記載する。

(6)　図・表は１枚の用紙に１つだけ書く。また図と表のそれぞれに一連番号をつけ，図１，表３のようにする。（上記要項補足参照）

(7)　図の原稿は半透明のタイプ用紙または淡青色方眼紙に黒インキで明瞭に書くこと。写真は明瞭なものを提出すること。

(9)　図や表は本文に比べ大きな紙面を要する（本誌１ページ大のものは原稿用紙4.5の本文に当たる）から，その割合で本文に換算し全ページ数の中に算入すること。

(10)　参考文献の書き方は以下の原則による。

文献記述の形式は雑誌の場合には，著者名（発表年），題目，雑誌名，巻号，論文所在頁；単行本の場合には，著者名（発表年），書名，版数，発行所，発行地，参考箇所の頁の順とする。また記載は原則としてファースト・オーサの姓（family name）のABC順とする。なお，上記要項補足参照。

(11)　本文が欧文の場合には上記要項に準じ，著者名と所属名は和文でも記入し，和文要約は掲載用となる。

「京都体育学研究」編集委員会　　〒610-0394　京都府京田辺市多々羅都谷1-3
同志社大学田辺校地　保健体育研究室気付

KYOTO JOURNAL OF PHYSICAL EDUCATION

ORIGINALS

Hisako HURUICHI : Development of Dance Imitation in Children ····· 1

Natsuko SAKA : A Study on Sport and the Social Theory in Norbert Elias ····· 9

MATERIALS

Keiichi OKAO : The Shortened Chronological Table of the Early Years of Women's Athletics,especially Middle-distance, Long-distance Running and Marathon ····· 17

Edited by Kyoto Society of Physical Education

Volume 14 / February 1999